針葉樹会報

第 150 号
2022 年 5 月

表紙写真＝北鎮岳　２０１９年12月27日　撮影・曲　文琛

目次

【私の思い出の一葉】……市畑　進　2

■追悼

追悼　岡垣君……石和田四郎　3

岡垣君の思い出……加地　幸雄　3

岡垣のこと……宮川　守久　3

■山行記録

毛勝谷より毛勝山登頂……中村　雅明　5

厳冬期大雪山系縦走失敗記……曲　文琛　9

80歳会員2名の秋の火打・妙高山行……竹中　彰　16

２０２１年度　富士山ビュー山行報告……佐藤　周一　22

四国八十八ヶ所お遍路の旅……前神　直樹　24

会務報告……29

学生の活動記録……41

編集後記……44

発行日　2022 年 5 月 18 日
発行者　針 葉 樹 会
（会長　前神直樹）
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第 150 号

編集人　岡田　健志
〒248-0022
鎌倉市常盤 937-53
会報幹事／岡田健志、藤本敏行

一橋山岳会ホームページ　http://huhac.com/

私の思い出の一葉

『一九五六年涸沢夏合宿』

現在、一橋大学山岳部創部１００周年誌の発行準備中です。中村　保会員（１９５８年卒）から沢山の写真をご提供いただきましたが、その中の１枚です。

この写真に市畑　進会員が「思い出」を寄せてくださいました。

中村様

１９５６年、涸沢夏合宿での写真です。

自分が、なんでこんなところに座っているのかわからない。左隣がＹ中村さん、右隣の女性、聴講生に入った東女の人で、お名前は何と言いましたかね、針葉樹11号にも何の記録もありません。

話を聞いているだけでしたが、彼女の入部を認めるか、否かで喧々諤々、先輩の意見を聞きに回ったりしていました。彼女はまだ、ご健在でしょうかね？

僕の記憶では、彼女は、北穂からのグリセード練習中に転倒して頭をうち、朋文堂涸沢ヒュッテに夏場だけ設置された医療用テントに入院、当分安静ということになり、食事は部員が交代で運んだ。

たまたま、僕と誰だったか二人で夕食を持っていったら、運ばれてきた滝谷の墜落事故者のオペに遭遇、血が出ている切れた頭を縫うというので、「君たちライトを集中してくれ」と頼まれ、オペが完了するまで付き合うことになった。

翌日、あれを見るととても登れないなとぼやきながら、それでも第三尾根を登ったことを思い出す。

本当に懐かしい写真ありがとうございました。

市畑　進（昭33（１９５８）年卒）

人物名

① 故 柴崎　新	② 中村　保	③ 故 岡垣　治雄	④ 澤木　一夫
⑤ 故 篠原　敏弘	⑥ 故 宇田川　徳治	⑦ 中野　勝弘	⑧ 塩川　清彦
⑨ 丸子　博之	⑩ 故 吉田　義則	⑪ 故 大須賀　広次	⑫ 上原　利夫
⑬ 峰高　教通	⑭ 故 江面　誠二	⑮	⑯ 石井　暉雄
⑰ 故 鈴木　健之	⑱ 高山　治	⑲ 中西　巌	⑳ 西海　隼雄
㉑ 鈴木　博武	㉒ 故 城戸　剛	㉓ 故 山田　邦行	㉔ 朝木　慶司（現姓 新井）
㉕	㉖ 小峰　隆	㉗ 故 山本　健一郎	㉘ 加地　幸雄
㉙ 枚田　美智子	㉚ 市畑　進	㉛ 故 中村　幸正	㉜ 故 甘利　仁朗
㉝ 故 渡辺　嘉佑			

参考；『針葉樹』12号　P162
ゴチック表示は針葉樹会員

名前の記入の無い方の名前が判明したり、名前間違えなどありましたら、
会報係までご連絡を下さい。

追悼 ― 岡垣治雄 会員

追悼　岡垣君

石和田　四　郎
（昭31（1956）年卒）

岡垣君のご逝去、心から哀惜の念やみません。小生より2年若く「力持ち、豪快、胃袋も丈夫？」でしたなあ。

出雲大社の門前、一等地で店をはり、昔々からの「ゆかり」深き家柄の御仁と承知して来ました。店を訪ねると、相変わらず「素朴な？」岡垣君が店の奥の方から現れて、懐かしく会話を交わしたことを思い出します。

岡垣君、ゆっくりと「おやすみ」下さい。

岡垣君の思い出

加　地　幸　雄
（昭33（1958）年卒）

岡垣君は1957−58年、僕等が四年の時、キャプテンでした。石和田さんがおっしゃる通り、「力持ち、豪快、丈夫」、本当にがっしりした、飾り気のない素朴な人柄でした。1957年の春山でしたか、明神東稜から頂上を越えて前穂に向かう途中、沢木君が転倒、岳沢へ滑落、視界から消え去りました。早速甘利さんと山本さんが救助に下降。他の人達も皆降りましたが、どういう弾みか今では覚えていませんが、岡垣君と二人だけ、前穂頂上に近い斜面にピッケルで堅雪を切り、辛うじてテントを張り、一夜を明かしたことがあります。そのピッケル今でも手元にあります。後で、沢木君は、松本近辺の病院に入院、幸い奇跡的に大打撲も骨折も無く、堅雪との摩擦や衝撃から回復したと分かりましたが、当時は状況不明。心配に満ちた一夜でした。食べ物は、米だけ、おかずも味付けも皆無。その上、高所ゆえ沸騰点が低いため、米もよく炊けません。それを二人で、一万尺の寒夜の風に揺さぶられるテントの中で、一粒一粒嚙っていました。でも大丈夫の岡垣君が側にいましたから、彼の据わった肝も伝わり、明日はどうにかこうにか岳沢を下れるという確信がありました。彼の精神力の賜物でした。卒業以来、音沙汰ありませんでしたが、最近、訪日の際、隠岐島へ行く途中、彼の出雲のお店に「今日は」と顔を出そうと夢見していましたが、それもならず、残念至極です。

岡垣君、僕は、今でもユタの山に四季を通して登っていますよ。

（2021.11.26　於猶汰州塩湖城）

岡垣のこと

宮　川　守　久
（昭33（1958）年卒）

針葉樹会のメール連絡で、同期の岡垣が8月に亡くなっていることが知らされた。ショックだった。昨年の奥さんからの便りでは、7年前の転倒による頸椎損傷事故やその後の脳梗塞による入院などがあったが現在は

介護老人ホームに入居して静かに静養中とのことで安心していたのだが。

山岳部での4年間、彼とは色々な思い出がある。合宿、荷揚げ。春休みに出雲の彼の実家に泊めて貰い、ご家族挙げての歓待を受けたことも。

今でも一番思い出すのは、晩秋の「北八ツ彷徨」だ。2人で三日間誰にも会わず、営林署の巡回用鉈目と高い枝に結ばれた赤い布切れを頼りに歩き、星を仰いでのビバークでは、これからの人生の夢や希望を語り合った。

1954.10 月遠見小屋にて（冬山荷揚げ）
前列 岡垣、後列左から 宮川（守）、上原、茂木、大庭
宮川守久会員提供

私のNY駐在時代には、出張の忙しい日程の中、わざわざわが家を訪ねてくれた。そうして、50歳を過ぎて生まれた末っ子の行く末を見届けられるか心配している彼を、名将山本五十六の例を引いて励ましたものだ（山本五十六は、父親56歳の時に生まれたので、五十六と命名された由）。

親御さんの介護と家業（出雲大社門前の大きな土産物屋）の継承のため生まれ故郷の出雲に戻った際にも、都会育ちの末の息子が果たして地元の子供社会に受け入れられるか、心配していた。

彼と最後に逢ったのは、10年くらい前に松江で講演する機会があった際、わざわざ大社町から出てきてくれて一夜酒を酌み交わした時だ。親の介護の苦労や数十年ぶり故郷に高齢者Uターンしたものの、地元社会との折り合いの難しさをポツリ、ポツリと語る彼の姿が印象的だった。若き日の山では毅然としたリーダー振りを発揮し、三井信託の役員としても活躍してきた彼だが、それなりの悩みを抱えていた。

年代、場所不明
左から 岡垣、宮川（守）
宮川守久会員提供

その彼が、ザイルのトップならぬ、同期のトップを切ってあの世に行ってしまった。寂しい限りである。

（2021年11月30日記）

追記

奥様からのご連絡によれば、当初胸に水が溜まり入院して、快方に向かったものの、誤嚥性肺炎で急な旅立ちとなられたとのことでした。

訃報

尾身　幸次会員（昭和31（1956）年卒）におかれましては、2022年4月14日逝去されました。謹んでご報告いたします。

山行記録

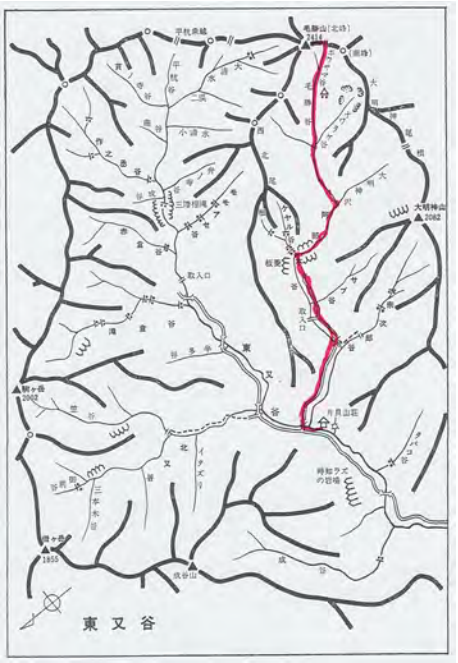
毛勝谷より毛勝山登頂

中村雅明
（昭43（1968）年卒）

本山行は2018年6月半ばの「鹿島槍ヶ岳慰霊登山」（注1）と同様に藤原さんが企画し、中村が同行しました。藤原さんの山行の狙いは「①北アルプスで唯一残った200名山、②最近尾根道も切り開かれたが、11時間もかかるので、昔風に谷の雪渓を詰める9時間が良い。長い雪渓の登下降は体力的にキツいがこれが最後のチャンスだろう」ということでした。私は恥ずかしながら毛勝山のことは「剱岳北方稜線にある毛勝三山の一つ」くらいしか知りませんでしたので、①分県登山ガイド『富山県の山』山と渓谷社　②日本登山体系『剣岳・黒部・立山』白水社を読んでにわか勉強をしました。

〝昔風に谷の雪渓を詰めるコース〟とは「片貝川東又谷―片貝山荘―阿部木谷―毛勝谷本谷―ボウサマ谷―北方稜線―毛勝山」です。文献②によると、田部重治が明治43年8月にこのコースから毛勝山へ登頂（注2）、冠松次郎が昭和3年10月にこのコースから毛勝山に登り、さらの中ノ谷から小黒部谷へぬけ鐘釣温泉へ下山している（注3）ことを知りました。近代登山黎明期のクラシックルートなので単に長い雪渓登り以上の意味があるコースでした。片貝山荘は片貝東又谷発電所の橋のそばの宿舎が魚津市に寄贈されたもので、登山者に開放されています。利用に当たっては魚津市の教育委員会に事前に申し込みます。ネットで所定の書式「利用申請書」、「登山計画書」を取得し、郵送すると「利用許可書」が届き宿泊が可能です。西北尾根コースを登る場合もここが拠点となります。

雪渓登下降用装備としてピッケル、軽アイゼンを持参しました。文献②に「雪渓は登るにつれて急になるが、最も急な部分で30度ほどでアイゼンはなくともよいがつけたほうが楽という程度」と書かれているので6本爪の軽アイゼンとしました。



毛勝谷（『日本登山体系』（剱岳・黒部・立山）白水社より）

（注1）『針葉樹会報』第142号「鹿島槍ヶ岳慰霊登山」中村雅明
（注2）『山岳第五年四号（明治43年11月）』「越中毛勝山」
なお、この5年後の大正4年に南又谷支流の釜谷を登り、剱、黒部東沢、赤牛岳を経て大町へ出るという長駆を敢行しています。
（注3）冠松次郎『山渓記　第三巻』春秋社「毛勝山・中ノ谷・小黒部谷」

■メンバー
藤原朋信（昭和44年卒）、中村雅明

■行程（タイム）
5月29日　魚津駅（14:50）＝（魚津交通タクシー）＝片貝山荘（15:30）

5月30日　片貝山荘（3:40）―（阿部木谷）―２ｐで大明神沢出合(5:47～5:58)―(毛勝谷）―４ｐで北方稜線（9:50～10:10）―毛勝山（10:25～30）―２ｐで大明神沢出合（11:45～12:00）―２ｐで片貝山荘（14:20～15:20）＝（魚津交通タクシー）＝魚津駅前アパホテル（16:10）

5月31日　アパホテル(6:30)―魚津駅(6:35～45）＝＝市振（7:22～30）―登山口(7:50）―展望広場（10:00～20）―登山口（11:10～35）―市振（11:51）＝＝糸魚川（12:10～47）＝＝東京（14:52）

■行動概要

●5月29日（土）　曇

今日は片貝山荘入りなので東京駅を 11:24 発の北陸新幹線で出発しました。コロナ禍中なので土曜日ですが自由席はガラガラです。２時間で糸魚川、そこから第三セクター鉄道の「えちごトキめき鉄道」、「あいの風とやま鉄道」と乗り継いで魚津駅に 14:45 着。魚津駅で予約してあった魚津交通タクシーに乗り片貝山荘へ向かいました。翌日の足慣らしの為に、片貝第３か第４発電所で下車、１時間前後徒歩で片貝山荘入りの予定でしたが、運転手が話好きで下車地点を通過してしまい片貝山荘に 40 分、15:30 に着きました。山荘は２階建て、宿舎であったので１階に４室、２階に４室と広々としています。すべて板床ですが２階の９畳の部屋が１番小綺麗で畳が２枚壁際に立てかけであったので、一人１畳敷いて寝ることにしました。翌朝が早いので、各自持参のささやかな夕食を済ませ 19 時前に就寝しました。

●5月30日（日）　晴れ

今日は毛勝山を往復した後、魚津駅前のホテルへ移動する予定なので 3:00 起床、朝食は摂らずに 3:40 に出発しました。天気は曇りですが、雨の心配はなさそうです。まだ暗いので１ピッチ目はライトを点けて歩きました。少し登った先の橋で東又谷本流と別れ、阿部木谷沿いの林道を登りました。毛勝山西北尾根コースの登山口を確認しながら林道を歩くと林道が残雪でふさがれた処にきたので軽アイゼンを着けました。林道は次第に狭くなり最後の堰堤（１０３０ｍ）で終点となり河原歩きとなりました。出発から１時間 20 分歩いた処で朝食を兼ねた小憩。正面奥に大明神山（２０８３ｍ）が望めました。

少し前から広がった青空をバックに雪が残るどっしりとした山容は迫力があります。この先の大明神沢出合の先まで、沢の中は大明神沢で発生した大崩落の土石流が運んだ土砂と石、木が凍った雪渓の上に積み重なっています。これは昨日、タクシーの運転手から「山抜け」と聞いていました。かろうじて人の歩いた痕跡を辿って進みました。その歩行は２０１２年にホワイトセールのバラシグリ氷河を歩いた時の悪戦苦闘を思い出させるもので

2021.5.30　阿部木谷から大明神山をのぞむ　撮影：中村雅明

した（注４）。

出発から2時間、大明神沢出合（１２３４ｍ）着。ここから左に折れて毛勝谷に入ります。毛勝谷は稜線近くまで雪渓が続いています。

最初は緩い傾斜で快適な登りでしたが、徐々にきつくなり軽アイゼンでも時折滑りながら三の又（１４８０ｍ）に7:17に着きました。三の又で３本の谷が合流しています。右手の谷（ナワタケ谷）か真ん中の谷か迷いましたが、右手の谷は上部が急なので、真ん中の谷を登りました。これが毛勝谷で正解でした。傾斜はさらに急になり、青空も消え稜線はガスの中で見えなくなりました。幸い雪渓は視界が悪くならなかったので、落石が気づきにくいことはありませんでした。２箇所クレバスを避けながら登りました。ボウサマ谷に入ると急傾斜で軽アイゼンでは足が流れてしまうので、１歩１歩２～３度靴先を蹴り込んで足場を作りながら登るので捗りません。次第に後続の藤原さんと離れましたが、ザックを下して休憩することができないのでそのまま先行しました。

先ほどはるか下の雪渓に見えた山スキーヤーが追いついてきました。下で藤原さんと会い、私が77歳であることを聞いたとのことで「すごいですね」とほめてくれました。「もう少しで稜線ですよ」と言ってくれたので少し安心しましたが、その後も急傾斜が続きます。帰路の下りが心配になりました。藤原さんが近くにいれば相談して登りを打ち切り下山したかも知れません。右に折れて傾斜が緩くなり雪渓が切れたところからハイマツをこいで毛勝山と毛勝山南峰（２４００ｍ）の間のコルにバテバテになって9:50に着きました。３時間50分の雪渓登りでした。先行し休憩していた山スキーヤーが「晴れていれば後立山が素晴らしいですよ」と声をかけてくれましたが、残念ながら一面のガスで何も見えません。藤原さんを待って休んでいると後続の山スキーヤー１人が到着し、山スキーで毛勝山に向かいました。さらに地元山岳会の女性２人が到着しました。２人とも10本爪アイ

2021.5.30　大明神沢出合から毛勝谷をのぞむ　撮影：中村雅明

2021.5.30　毛勝谷途中から雪渓を見下ろす（人物は藤原）　撮影：中村雅明

ゼンです。やはり軽アイゼンは失敗でした。10本爪であればもう少し楽に登れたのに、と悔やみました。20分程で藤原さんが到着し、北東３００ｍ先の毛勝山に向かいました。緩い登りの雪稜歩きなので晴れていれば周囲の山を眺めながらの楽しい登りだったでしょう。15分程で毛勝山（２４１５ｍ）着。頂上近くの雪の台地で地元山岳会のパーティが雪洞設営訓練をしていました。地元の人にとって毛勝山は足繁く通う山なのでしょう。頂上台地は雪が消え２等三角点、石仏、毛勝山頂上標識が露出していました。熟達者が少数訪れる北方稜線の落ち着いた名山にふさわしい雰囲気が気に入りました。晴れていれば３６０度の大展望、「目の前に毛勝三山の釜谷山、猫又山、その向こうには赤谷山、池の平山、そして剱岳、黒部川をはさんで後立山の山々…」（富山労山の山行報告「毛勝山山スキー」より）を眺望することが出来なかったのは残念です。

頂上で写真を撮った後、コルに戻りガスが晴れそうにないので下りにかかりました。

急斜面（40°位？）を登りのトレースを辿って下り始めましたが、雪があまり溶けていないため靴の踵が雪渓に蹴りこめません。下り始めて直ぐに中村が滑落しました。仰向けから腹這いになってピッケルストップの体勢を取りましたがピックが浅くて流されました。10ｍ位滑るとスピードが増して「やばい」と思いました。懸命にピックを突き刺してかろうじてストップしました、そのまま滑落していたら途中に穴をあけているクレバスの隙間に激突して骨折かもしくは死亡していました。今でも「あのまま滑っていたら…」と怖くなります。10本爪アイゼンであれば滑落が防げたかも知れません。軽アイゼンなので後ろ向きに足場を確保しながら慎重に下るべきでした。その後は臆病な位慎重に下りました。クレバス箇所を過ぎ、三の又まで降りて傾斜が緩みホッとしました。傾斜が緩くなっても雪渓が固いので２人とも何度も転びました。骨折はしなかったものの体中を打ったので帰宅後１週間ほど節々が痛みました。コルから１時間15分、11:45に大明神沢出合に着き大休止しました。この頃になってガスが晴れて青空が広がり陽も射して濡れた衣服も乾きました。往路を順調に戻り、片貝山荘に14:20に着き、登山を終了しました。行動時間が11時間20分、当初想定した９時間を大幅に超過しました。70代半ばの高齢２人にとっては厳しい山行でした。山荘でコーヒーを飲み、掃除、荷物整理をしながら前日予約しておいたタクシーを待ち、魚津駅前のホテルに16時過ぎに入りました。

2021.5.30　毛勝山頂にて（藤原）　撮影：中村雅明

（注４）『針葉樹会報』第１２６号「インド　ヒマチャルプラデッシュ・ヒマラヤの旅」佐藤久尚

●5月31日（月）　晴

昨日のハードな雪渓登下降の疲れが残っていましたが、折角富山まで来たので帰りがけ

の一山として大鷲山（８７１ｍ）を糸魚川手前の市振駅から往復することにしました。

ガイドブックには「ヒスイ海岸から登り、山の標高そのものを自分の足で上がる。・・・海を見下ろし、栂海新道の山々を眺めながら、気持ちのよい尾根を歩く、なかなかの山である」と書かれており、それがこの山を選んだ理由です。但し、２５０００分の１の地図「親不知」には山名はなく、８６１．８地点の三角点の点名「大鷲谷」から名づけられています。市振駅から約１㎞の境川河口の登山口から登り３時間、下り２時間。市振駅発7:30で13時前に余裕を持って戻れる目算でした。ところがかなり急な尾根道を真面目？に登っている積もりでしたが中間地点の展望広場まで２時間以上かかってしまいました。「どうもガイドブックの時間が過少だ、この先、頂上までの往復時間もかかりそう、電車の時刻に間に合わない」と意見一致し、この広場で大休止した後下山しました。

登山口まで50分。そこで小憩後、市振駅に向かいましたが駅に着いたら1分後の電車に乗れたので、糸魚川では予定より1本早い新幹線に乗れました。

（２０２１．９．６投稿）

■藤原さんのコメント

（中村宛メール：５月31日より抜粋）

中村さん　明るいうちに帰ると楽ですね！後片付けを終えて風呂に入りゆっくりくつろげました。中村さんに引っ張って頂いたおかげで10年来計画倒れに終わっていた毛勝山に登ることが出来ました。70代半ばでの標高差１７００ｍの雪渓上り下りは大変きつかったのですが、剱岳北方の山に初めて足を踏み入ることが出来て満足です。次は秋の紅葉時分に僧ヶ岳か、馬場島から赤谷山も良いかもしれませんね！　当面はコロナに打ち勝って先の計画に繋げたいものです。

■中村の感想（藤原宛返信：５月31日）

藤原さん

お疲れ様でした。私は16時前に帰宅できました。同じく夕方まで山の荷物を片付けゆっくりビデオを見てくつろぎました。

今回、剱岳北方の山へ誘っていただき感謝します。この山域は全く未経験エリアだったので新鮮でした。遠いイメージでしたが新幹線が利用できるので楽ですね。大分理解度も上がりましたのでこの山域今後もお誘い下さい。

足腰に加えて、腕、上半身も痛みます。いつもは翌日以降に遅れて痛むのですが今回はすぐ痛みが出ています。毛勝山の雪渓登下降が並みではなかったのですね。頑張れて登れてよかった!!!

厳冬期大雪山系縦走失敗記

曲　文　琛

（平30（２０１８）年卒）

２０２１年12月24日

札幌～上川（池乃屋旅館）

札幌駅の連絡通路は老若男女で溢れていた。ブランド品の紙袋をぶら下げた人々が行き交う駅舎で、みんな幸せそうな表情を浮かべていた。南口方面へ振り向けば、駅前通りのイルミネーションが眩しいほど明るく、世の中はクリスマスイブの夜である。

２０２１年12月25日から年始にかけて、大雪山系・黒岳から入山し、トムラウシ温泉東大雪荘へ下山する。これが今回の計画である。

冬の大雪を縦走しようと思うきっかけは、黒部で山岳写真家として活躍している志水哲也の著書『果てしなき山稜――襟裳岬から宗谷岬へ』であった。28歳の若き著者は１９９

３年の冬から春にかけて、北の分水嶺とも呼ばれる襟裳岬から宗谷岬へと続く(日高山脈、大雪・十勝連峰、石狩山地、北見山地、宗谷丘陵が連なる）６７０㎞あまりの稜線を、単独ノンデポで歩いた。彼の山行記録から大きな刺激を受け、以来、「厳冬期」「単独」「縦走」といった言葉に無性に憧れるようになった。

志水哲也がやり遂げた壮挙に比べたらちっぽけな計画ではあるが、雪山経験が乏しく、意志も体力も大して強くない僕にとっては大きな挑戦に違いない。

あかねが駅まで見送りに来てくれた。改札の外にいる彼女に手を振って、特急列車の止まるホームに向かう。これから10日間はたくさん心配をかけるだろうし、つらい思いをさせるかもしれないと思うと、申し訳ない気持ちになる。

12月25日　上川～層雲峡～黒岳～黒岳石室

層雲峡方面：曇り時々晴れ、稜線上：強風、地吹雪 -25℃～-20℃

09:30 黒岳7合目リフト乗り場 → 12:15 黒岳山頂 → 13:00 黒岳石室

出だしは順調だ。黒岳ロープウェイは強風で運休になることがしばしばあるが、今日は層雲峡側が晴れており、7合目まで一気に上がることができて、かなりの時間節約になる。これを楽観視して一日で白雲岳避難小屋まで歩こうと目論んでいた。

リフトの終点である7合目で下車し、黒岳山頂を目指す。先行のバックカントリースキーヤーが数名いたおかげで、トレースがちゃんと付いており歩きやすい。とはいえ、二週間分の食料の入っている30 kg近くの荷物が肩に食い込み、思うようには進まない。スキーのトレースをそのまま歩いても、スノーシューではやはり10 cmほどさらに沈んでしまい、スキーとの浮力の差を思い知らされる。夏道のある東斜面では5～10 m／sの弱めな風だが、時折向こう側からジェット機のような轟音が聞こえてくる。

ジグザグを繰り返しながら標高を上げていく。招き岩の黒い影がルートの斜め上に現れ、山頂は近い。

山頂直下から、スキーヤーたちが雄叫びをあげて、颯爽と急斜面を滑って下りていく。一人のスノーボーダーが「頑張ってくださーい！」と遠くからエールを送ってくれた。

山頂近くの雪が氷化しており、スノーシューではやや心細いが、ツルツルな急斜面の真ん中でアイゼンに履き替えるわけにもいかない。雪をしっかり踏み固めながら慎重に直登する。

黒岳山頂（１９８４ｍ）に着き、層雲峡側で聞こえた轟音の正体がすぐにわかった。風が一気に強まったが、神社と標柱が見えるくらいの視野はあった。しかし縦走路に入った途端、地吹雪で周りが真っ白になり、視界は皆無に近い。

正面から吹いてくる西風でまぶたはまともに開けず、涙が出るも一瞬にして睫毛に付着したまま凍結していく。角膜も凍ってしまい

2021.12.25　黒岳頂上　撮影：曲文琛

そうだ。ザックからゴーグルを取り出す余裕もなく、石室に向かってひたすら進む。

石室は深い雪の中に埋もれており、赤い屋根の部分だけ地上に出ている。これ以上進むことはできない。建物手前の吹き溜まりに雪洞を掘ってビバークすることにした。

動きが止まると体が急速に冷えてしまうため、疲れてきても、とにかく掘りまくるしかない。2時間近く作業した甲斐があって、やっと横になれる比較的快適な一人用の雪洞が完成した。雪洞の中に逃げ込んで、一息つく。

作業中、ハードシェルとソフトシェルのファスナーは胸元までしか閉まっておらず、気がついたらソフトシェルとバラクラバが雪まみれになっていた。体温で雪が溶けては凍り、裏地に付着して取れない。また、行動用手袋を着用したまま作業していたため、インナーのみならずミッドとオーバーグローブまで手汗と雪で濡れ、凍っていた。自分の不注意と経験不足に落胆する。

まだ16時前というのにもう薄暗くなってきている。外気温はマイナス20℃以下まで下がるが雪洞の中は無風でマイナス5℃と暖かい。

今日は行動時間こそ短いが、雪洞掘りでかなり疲れた。フルグラと硬い板チョコでエネルギーを補い、素手で冷えた足の指を温める。

そして夜が訪れ、ゴーゴーと怒鳴る風の音、入り口を塞ぐツェルトがはためく音が雪洞の中に鳴り響いていた。僕はシュラフを身にまとい、仰向けになって暗闇の虚空にある一点を見つめていた。自分はとんでもない場所に来てしまったと思った。

12月26日　爆風　-25℃～-20℃　停滞

朝6時頃、あまりに異様な静けさで目が覚めた。風が止んだかと思いきや、一晩中に吹き溜った雪で出入り口は完全に塞がってしまっていたのだ。ショベルで雪の壁に小さな穴を開けるや否や、猛烈な風雪が穴から入り込み激しく顔に吹き付ける。この風に吹かれながら行動することは到底無理だと悟り、再びシュラフに潜り込む。

眠ったり起きたりしているうちに11時になる。ラジオをつけるとNHKの中国語講座が流れていた。どうやらこの場所は電波が悪いようで他の番組がまともに見つからず、仕方なく聞く。空腹を感じ始めたものの、飯を作るのが面倒だ。黒糖飴をボリボリ噛んで、シリアルを少し食べた。足の冷えを和らげるために暖かい紅茶を作って飲んだ。

NHK中国語講座は思ったより面白い。「うちの犬は絵が描けるんだ。しかし何を描いているかさっぱり分からないんだ。」という謎の例文が出てきた。

除雪と定時連絡があるため、めんどくさがりつつも出かける準備をする。まずは散らかっている荷物をザックに適当に詰めこむ。羽毛のジャケットとズボンを脱ぎ、ハードシェルに着替え、靴を履き、ゲイターをつける。それからバラクラバとゴーグルで口と目をしっかり覆い、最後にオーバーグローブをはめる。雪洞の中の空間が狭く、体も寒さで鈍くなったせいで、この作業に1時間ほどかかった。フル装備を身につけ、仰向けになって出入り口を塞ぐ雪の塊を足で蹴飛ばし、外へ出る。

外は風速20ｍ／s以上の冬嵐、視界は１００ｍ程度。ショベルを手にして素早く除雪する。石室周辺は電波が通じないが、黒岳方面へ50ｍほど歩けばdocomoとauいずれも使える。札幌にいるあかねと会社の上司、東京にいる友人に無事を伝える。

昨日雪の深さを測るためにどこかに挿しっぱなしにしたゾンデを回収しようと石室周辺を探してみたが見つけられず、探しているうちにあまりに厳しい寒さと風に耐えられなくなり、雪洞へ戻る。つけっぱなしにしていたラジオから高校駅伝の結果が伝えられていた。

ラジオニュースによれば、数年に一度クラ

スの寒気に日本が襲われ、日本各地では大荒れの天気となっているとのこと。北海道では平均風速20～25ｍ／ｓ、瞬間最大風速30～35ｍ／ｓの強風警報が出ているそうだ。

停滞対策としてザックに入れた『生と死のミニャ・コンガ』（阿部幹雄）を読み始める。

雪洞の外には剥き出しの自然がある。僕に許された唯一のことは、この縦１．８ｍ横１ｍ高さ70㎝の雪の箱の中で芋虫のように身を縮こまらせ、ただただヘッデンの微弱な明かりを借りてひたすら本を読むことだけだった。

12月27日　晴れのち風雪
-25℃～-20℃　風強め

11:30 黒岳石室 → ??北鎮分岐 → ??中岳 → 15:00 間宮岳 → ??裏旭野営指定地

予想天気図では等圧線の間隔は前日より広くなるが、大雪山あたりは気圧の谷となっており、晴れる期待が薄いので、早起きする必要もない、という僕の予測を見事に裏切ったのが27日の朝だった。

ラジオ天気予報によれば、28日から再び冬型が強まるとのこと。年始にかけて1月2日まで回復せず荒れ続ける可能性もあるという。進むにしても引き返すにしても、今日というチャンスを逃すわけにはいかない。

2021.12.27　黒岳石室より　撮影：曲文琛

しかし稜線上のホワイトアウトと爆風を体験した今では、僕はすっかり自信を失った。たとえ今日中に高根ヶ原を抜け、忠別岳避難小屋にたどり着けたとしても、ヒサゴ沼避難小屋やトムラウシあたりで荒天に捕まることはおそらく避けられない。悪天候が続くと雪も相当積もるだろうし、カムイサンケナイカールのトラバース中に、雪崩が起きる可能性も大きくなる。そもそもホワイトアウトの中でルートファインディングがうまく行くだろうか…

今の自分では下山予定日までにトムラウシ登山口にたどり着けるとは思えない（例えば生還できても予定下山日を過ぎて大騒ぎを起こしてしまいそうだ）。

ただ、層雲峡へ引き返すのもあまりにも情けない…

夏と冬に何度も登った旭岳なら、視界が多少悪くてもなんとか下山できるはず。

ということで、僕は石室を後にして白く輝く北鎮岳へ歩き出した。

北海道最高峰旭岳と黒岳を結ぶ表大雪の縦走路は、夏には至るところ数多くの高山植物が咲き乱れ、遅くまで残る雪渓と相まった絶景を求めに来る登山客で賑わう、北海道の代表的なトレッキングルートである。しかし厳冬期のこの場所は、生き物の痕跡が一切見当たらない（ナキウサギはどこかの穴に隠れてたくましく生きているはず！）。絶えず吹き続ける西風と舞い上がる雪煙は頑なに人間を拒絶している。

右手の凌雲岳（２１２５ｍ）は登山道がついておらず、夏山の登山対象とされていないが、３月～５月天候のある程度安定する時期

2021.12.27　中岳付近　撮影：曲文琛

には山スキーヤーに人気があるらしい。左手御鉢平方面は少しガスっており、烏帽子岳の尖った山頂が微かに見えた。

凌雲岳を後にして、前方のなだらかな山頂を持つ巨大な山は標高北海道第２位の北鎮岳（２２４４ｍ）だ。夏に黒岳や愛別岳を目指す途中三回ほど頂上に立ったが、三回とも展望がなかったせいで、自分の中ではどうしても印象の薄い山となっている。雪に覆われた北鎮は、とても柔らかく優しい印象を受けた。山スキーができるなら山頂から滑ると気持ちいいに違いない。

風が通り過ぎる雪原はシュカブラができており、アイスバーンとなっている場所も少なくないが、斜度が緩やかなため、スノーシューでも問題なく歩ける。中岳分岐をすぎた頃、視界が悪くなる一方で、風も強まるばかりだ。時刻は14時になろうとしている。もっと早く出発するべきだったと後悔する。間宮岳（２１８５ｍ）直下のコルで危うく東側の斜面に下ってしまいそうだった。

コル手前の急な斜面を下り始めた頃はひどいホワイトアウトとなってしまい、視界ほぼ皆無、見えるのは自分の足元のみ。地形も方向も何もかも全くわからず、気が狂いそうだ。ＧＰＳに頼って一歩一歩慎重に下っていく。ようやく斜度がゆるやかになり、なんとか裏旭野営指定地周辺に着いたようだ。

行動が止まると体が急速に冷えてきて、一刻も早くテントを立てこの風を避けなければならない。しかしポールが風に持って行かれてしまい、本体のグロメットにうまくはまらない。

風を真正面から受けながら作業しているうちに、耳の感覚がおかしいと思って触ってみたら、解凍途中の鶏胸肉のような感触だった。慌てて半分しか立っていないテントの中に一時避難し、素手を耳に当てて温める。休んでは出直し、何度やってもうまくいかず、邪魔な風や話を聞いてくれないポールにだんだん苛立ってきた。なんとしてでもテントを立てねばと焦燥感に駆られ、「ウォオぉぉ!!」「フワあぁぁ！」「クソおぉぉ!!」と叫びながら、ありったけの力で飛ばされようとするテントを抑えてポールを曲げた。やっとポール２本ともグロメットにはまり、テントが完成した。

靴のままテントの中に倒れこみ、心臓の高鳴りが止まらずとも、ひとまず命は助かったと少し安堵する。エネルギーは激しく消耗したはずなのに食欲が全く湧かない。カタカタ凍った板チョコ一枚とシリアル少々を食べ、温かい紅茶を少し飲んで、横になる。

ラジオをつける。やはり他の山域でも悪天候で遭難事故が相次いでいるらしい。氷ノ山で男性一人が行方不明。北海道では26日に上ホロカメットクで30代女性一人が仲間とはぐれて遭難し、天候が回復した27日午後一人で歩いていたところをヘリに発見され救助されたと聞く（この時、遭難女性は実は自分の知人であることをまだ知らなかった）。

シュラフの中で胸に手を当ててみたら心臓の鼓動をしっかり感じた。なんだか嬉しくて、興奮していた。

12月28日　晴れのち風雪　停滞

11:00 裏旭野営指定地 → ??２０７４ｍコル手前撤退

眩しい日光で目が覚める。外は晴れていて、今日こそ旭岳経由で下山しようと考えた。

結局昨夜眠りについたのは23時過ぎで、起床と出発がかなり遅くなった。

テント撤収して山頂を目指す。撤収中、銀マット一枚が風に飛ばされなくなってしまった。歩き出した頃はすでに雲行きが怪しくなっていた。３００ｍほど進み、２０７４ｍコル手前で再び視界が悪くなって、やがてホワイトアウトに。

このまま進むと危険だと思い、テン場へ引き返す。作ったばかりのトレースは吹雪の中でもう無くなりかけていた。

やはり強風の中でのテント設営は難航する。無風状態だと10分でできてしまう作業は、１時間以上かかった。ゴーグルの内側が凍って使い物にならず、ゴーグルを外すと今度はメガネレンズも凍ってしまう。10分ほど作業すると寒さに耐えられなくなり、その度未完成のテントの中に逃げ込む。作業中、いつもかけていたメガネもどこかに落とした。仕方なく予備の度付きサングラスで代用する。

風がより一層強くなったか、テントの向きが悪かったか、飛行機の轟音と勘違いするほど強い西風が波のように絶えず押し寄せてくる。その度テントごと、体ごと持ち上げられ、半分宙に浮く状態になる。テントの中の空間が極端に狭くなり、背中で風に対抗するだけで精一杯、まともに寝ることもできない。

『生と死のミニャ・コンガ』を読了。１９８１年北海道山岳連盟隊のミニヤコンカ（中国四川省　７５５６ｍ）遠征中、山頂直下で事故が発生し、ザイルで結ばれた７人が同時に滑落し、死亡した。その場にいたメンバーで、たまたまザイルに加わらなかったことで生還を果たした唯一の隊員は著者の阿部幹雄であった。「なぜ自分だけ生き残ったのか」、その理由を自分に問い直し続ける辛い葛藤が書き綴られており、読んでいて何度も目を潤ませた。

12月29日　風雪　停滞

旭岳の裏側にあるこの場所で足止めされて三日目になる。

昨日はひどい目にあったから、天候が回復しない限り、テントから一歩も出ないことに決めた。

高山みなみが詩を朗読する特別番組がここ数日放送されている。今日は谷川俊太郎の『生きる』。コナンが詩なんかを真顔で読んでいると想像すると、内容がなかなか頭に入ってこない。

いまこの場所にいること、これ以上、生を味わえる濃密な時間はない。

風が一向に弱まってくれない。そろそろうんざりだ。

ハンナ・アーレント『人間の条件』を読み始める。左手と右手を交代で太ももの間に入れて温める。

テントの中に一日中閉じ込められると、時の流れ方、あるいはその受け止め方が変わってくる。ラジオから１時間おきに現在時刻を伝えられ、その瞬間、時計の針が狂ったように一気に進んだ気がする。その１時間は一瞬のように思えて、永久のようにも思える。時は金でもないし、効率的に使おうともしない（その発想すらない）。僕は時間の国から疎外され追放され、枯渇した時の川の河床を無関心に傍観しているだけなのだ。

人間はどこにいるんだろう。70億もの人間がいるというのに、別にこんな場所でも２人や３人がいてくれてもいいだろう。

10年近く前に読んだサン＝テグジュペリの『人間の大地』を思い出す。飛行機が墜落

し、北アフリカの砂漠を何日もさまよい死にかけた著者がアラブ人の遊牧民に助けられる。他の内容はほとんど忘れているが、このエピソードだけは覚えている。

いつも通う北十八条駅前の本格中華が恋しい。熱いお風呂に浸かりたい。人間に会いたい。

12月30日　風雪　-20℃前後

9:50 裏旭野営指定地 → 11:00 旭岳 → 14:30 旭岳石室 → 15:00 姿見

31日と1日は大荒れ決定。風が少し弱まる可能性のある今日中に下山できなければ、少なくとも1月2日までチャンスは訪れない。食料燃料は十分に残っているが、テントポールがもつかどうか極めて怪しい。

4時起床、風はまだまだ強い。依然として食欲があまりないが、頑張って味噌ラーメンを作って食う。

7時、風弱まらず、視界なし。少し弱気になって、救助を待とうかと一瞬考えたが、一刻も早く風呂に入りたいし、そもそも電波が通じない以上自力で下山するしかない。フル装備を身につけテントの中でラジオを聴きながら待機する。

9時、少し風が弱くなった。視界も回復し、旭岳の尾根、熊ヶ岳と後旭岳も微かに見えた。素早くテントを撤収し、出発する（一昨日落としたメガネは無事発見）。

旭岳山頂（２２９１ｍ）までの標高差は２００ｍ強しかない。山頂まであと１００ｍの地点で再びホワイトアウトとなったが、温泉と温かい食事が待っているぞと自分に言い聞かせながら、強気で行く。クラストした斜面にアイゼンを効かせて尾根を直登すると間もなく山頂に到着。真っ白な中、山頂の標識を探す気にもなれず即下山。下山中は西風に直撃されることになり、ゴーグルの内側が凍って全く見えない。ゴーグルを外せばわずかな視界を得られるが、目が吹雪を浴びてなかなか苦しい。

地形がほとんどわからないため、夏道を示す鉄骨が道しるべとなる。視界は10ｍあるかないか程度で、かろうじて次の鉄骨が見える。ＯＰＰＯのスマホは限りなく頼もしく、モバイルバッテリーで充電さえしていれば、体感マイナス40℃の極寒をものともせずサクサクと動いて現在地を示してくれた。

突如として動く黒影が前方に現れた。人の影だ。いや、こんな天気に人が登ってくるはずがない、幻でも見たのか。しかしその影はだんだん鮮明になり、間違いなく生きている人間の姿であった。

5日ぶりに会った生身の人間。色々話したいところだが、お互いの声が風に紛れてよく聞こえない。短い挨拶を交わして下山を続行する。

相変わらず厳しい状況だが、近くに人がいると分かっただけで、心境はだいぶ変化した。

山頂直下で出会った方が登頂後、足の遅い僕に追いついてきて、二人で下山することとなった。さっきまでの心細さと緊張感からかなり解放されることができた。

最終ロープウェイは15:40、なんとしても間に合いたいので足を早めるが、まっすぐ歩くことがなかなか難しく、直進するつもりでも何度もルートから外れた。

標高を下げれば下げるほど風が弱まり、視界も少しずつ良くなっていく。3時間歩いて、やがて１００ｍほど先に旭岳石室が見え、一気にほっとする。深雪ラッセルをするも気持ちは軽快極まりない。

目指す先に姿見駅の駅舎があって、観光客がいた。日本語、英語、中国語の放送が聞こえた。

旭岳方面へ振り向く。相変わらず真っ白で何も見えない。その真っ白な世界から僕は帰ってきた。

【反省・総括】

姿見駅前で下山をご一緒にしてくださった方と写真を撮りあって、ＬＩＮＥで交換した。彼もなかなかの猛者で、日帰りで旭岳に登るその前日まで、ツェルト一つで五日間をかけて十勝岳から富良野岳山麓の原始ヶ原まで縦走したという。

一週間近く閉じ込められたが、幸いにして顔と足の指が軽微な凍傷になった以外、五体満足。

今回予定していたコースは、天気でほぼ全てが決まる。エスケープルートが存在しない上、２０００ｍを超える稜線では常に冬の季節風に晒されるため、悪天に捕まってしまうと行動・撤退の判断が非常に難しく、長時間のビバークを余儀なくされる。

当初、４、５日行動できればラッキーと想定していたが、実に甘かった。大寒波の影響もあって、実際12月25日から1月3日までの間、ある程度良い条件が揃ったのはせいぜい2．5日位しかなかった。年末年始という厳冬期の中でも特に天気が不安定な時期に縦走を実行するなら、もっと予備日をとっておくか、視界がきかなくてもある程度正確かつスピーディーにルートを見つける能力は必須である。

また、本コースはアップダウンがあまりないものの、水平方向の移動距離が長く、スノーシューよりもスキーのほうが適していることは言うまでもない。今後、より一層スキーの練習に励みたい。

ほかにも教訓として、雪洞を掘る際には作業用手袋を使用すること、ファスナーをしっかり閉めること。ゴーグルは一回凍ると使い物にならなくなってしまうため、凍らせないように工夫するか、予備用ゴーグルを持つこと。細かいことではあるが、油断するとひどい目にあうと思い知らされた。

結果として今回は厳冬期大雪相手にほとんど勝負にもならず完敗に終わった。自分の実力不足を痛感したほか、雪洞ビバーク、ホワイトアウト下山など貴重な体験もたくさんできた。これらの経験を糧に今後しっかりスキルアップを図り、いつかまた冬の大雪に挑戦したいと思う。

80歳会員2名の秋の火打・妙高山行

竹中　彰
（昭39（１９６４）年卒）

予て同期の本間さんと秋の火打・妙高山行を計画していたが、実施1週間ほど前から日本の南にある台風16号が急速に発達して関東方面直撃の懸念が出て、実施日程が二転三転した。

結局天気予報と小屋の空き状況を睨み合わせて9／28－30に実行することに決定した。

80歳老爺2名の体力を考慮して、通常一泊2山の行程を山中二泊のユッタリ計画とした。

台風の影響を大きく受ける直前に下山し帰京できたことは幸いであった。

【行程記録】

9／28　東京発 6:28（はくたか５５１）、長野経由妙高高原駅着 8:57、頚南バス笹ヶ峰（１３００ｍ）着10:25、登山口出発 10:36、2ピッチ － 黒沢橋 11:45、6ピッチ － 富士見平（２０５０ｍ）15:05、2ピッチ － 高

谷池ヒュッテ（２１００ｍ）着16:30

９／29　高谷池Ｈ発6:40、天狗の庭（２１１０ｍ）通過7:05、２ピッチ ― 雷鳥平（２３００ｍ）8:10、火打山頂上9:28―10:28、３ピッチ ― 高谷池ヒュッテ（昼食12:06―40）、２ピッチ ― 黒沢池ヒュッテ（２０５０ｍ）着14:05

９／30　黒沢池Ｈ発5:45、１ピッチ ― 大倉乗越（２１５０ｍ）6:16、２ピッチ ― 長助池分岐7:26、４ピッチ ― 妙高山北峰（２４４６ｍ）（昼食10:05―46）、南峰（妙高大神２４５４ｍ）11:00―11:10、クサリ場等を経て３ピッチ ― 天狗堂（１９３０ｍ）13:05、（大谷ヒュッテ（１７８０ｍ）前通過13:35）３ピッチ ― スカイケーブル頂上駅（１２６０ｍ）　15:15 妙高高原駅発16:36　新幹線経由21時前に帰宅

【記録】

９／28（火）晴れ時々曇り：東京 ― 妙高高原駅 ― 笹ヶ峰 ― 高谷池ヒュッテ

当初は、つくし野駅発一番の田園都市線を捉まえても計画通り東京駅6:28発「はくたか５５１号」に乗車するのは少し難しいと考え、場合によっては大宮（北与野）に住む長女のマンションに前泊して大宮で乗車することも検討したが、成瀬駅ルートに変更して長津田駅始発に乗車すれば表参道、赤坂見附乗換えで十分間に合うことが判明し、４時半過ぎに自宅を後にする。東京駅コンコースの駅弁屋で朝昼２食を調達して予定の車両に向かう、

東京駅から、新幹線で山登りに行くなどは何年振りか、かなり以前の大朝日連峰縦走で山形に向かって以来か・・・、などと思いつつ４号車自由席を確保して、ホームに戻って本間さんを探す。見慣れた白髪頭の人物をすぐ見つけ、声をかけて席を移動して貰う。

発車後朝食を摂り、久し振りの信越線（北陸新幹線）車窓の景色を眺めるうちに１時間半余で長野駅に到着し、しなの鉄道北信濃線に乗り換える。車内は途中まで通学生で混んでいたが、２、３駅で空き、長野から30分余りで終点妙高高原駅に到着。下車して駅周辺をぶらぶらし、笹ヶ峰行きバス乗り場を確認する。暫く観光案内所で周辺観光案内パンフレット等を確認し、下山時に利用予定のスカイケーブルの割引券をゲットする。

バスは定刻9:35に発車、途中いもり池、杉野沢などで観光客を乗せて進み50分で標高差８００ｍ稼ぎ標高１３００ｍ余の笹ヶ峰の駐車場に到着した。

高谷池ヒュッテに向かうべく、火打山登山道に向かうと入口ゲートに登山届提出箱の反対側に「**妙高山・火打山地域入域料＊**」と書かれた大きな木のボックスが設置されていた。本間さんはスルーして行ったが、登山道整備・雷鳥保護等に活用される趣旨に賛同して５００円を投入して、小さな木のタグ１つをゲットして進む。なお、ここで計画書を投函する予定だったが、入域料支払いに注意が向いたため、結局投函しないまま高谷池ヒュッテ受付時に届けることに。

＊現地到着まで全く知らなかったが、帰宅後ＨＰで確認すると試行期間を経て昨年から本格運用されているとのこと。なお、ヤマレコとの提携で事前決済制度もある由。昨年実績は７―10月で３７０万円収受。

暫くはブナや灌木の明るい林の中の笹道を辿るが、途中で道を外れた所でガサガサと音がするのでヒョットしてと身構えるが現れたのは地元のキノコ狩り夫婦であった。10分程で遊歩道分岐を過ぎ、久し振りなのでピッチ30分で刻んで２ピッチで黒沢橋に着くが、本間さんの行動予定表に対して10分遅れ程度とまずまず。ここまでは緩い傾斜路を１時間20分で標高３００ｍ稼いだことに。橋を渡って１ピッチ余で急登を交えた十二曲がりの難所にかかる。

久し振りの山行で、自宅蟄居中のトレーニ

ングも殆どできておらず、脚力と心肺機能の低下に不安を抱えつつの今回の計画参加で、ここが本日の正念場と思いつつ進み、角ごとにナンバー標示（ex. 10／12）が目安になるがなかなか捗らない。気息奄々３ピッチ半、オオシラビソの間の木の階段をこなし次第に傾斜も緩み疎らになった樹間を進む様になると、漸く富士見平分岐に達する（２０６３ｍ）。

条件が良ければ黒姫山の上に富士山も望める場所の様だが、曇りがちの天気では望むべくもない。道標には直進（右側）は黒沢池ヒュッテ、左に折れて高谷池ヒュッテを経て火打山とある。ここで本間さんが高谷池ヒュッテ到着遅延の連絡を試みるが、スマホが繋がらず断念。本間さんがもう暫く休むとのことだったので、一人先行する。黒沢岳の左裾をトラバース気味にネマガリダケの中を進むが、道はぬかるんで歩きにくい。30分ほど進み高谷池方面が望める開けた地点で残念ながら火打山は雲に隠れていたが、初めてヒュッテの大きな三角屋根が遠望できた。

岩と粘土のミックスで歩き難い大きな段差の登山路を進む。長時間の歩行で余力も乏しくなっていたが目的地が確認できたことで、気持ちを奮い立たせる。結局富士見平分岐から1時間を超えて16時30分に高谷池Ｈに到着した。受付を済ませて寝床のある2階に案内されるが、コロナ対策で客数を半分程度に絞り、更に一人ずつ厚めのビニールシートを三方に巡らせて完全個室の趣であった。暫くして本間さんも到着したが恒例のビールでの乾杯は少し時間を置いてからとのことで、夕食まで横になって待機する。

18時頃に食事準備の声がかかり、食堂に向かうと、食堂前のテーブルにご飯のジャー、ハヤシライス、カレーの鍋、ラッキョ等が置かれ、ビニール手袋を支給されて各自で皿に好きなだけ盛り込む。前の客に倣ってご飯を真ん中に置き両側にハヤシとカレーを入れて2色にする。各自テーブルに運ぶが、時節柄やはりアルコールを嗜みながらの雰囲気ではなく食事に専念する。食後2階の寝床に座って本間さん持参の菊水辛口カップを2本ずつ開ける。途中でこの日のアルバイトの厳しさから眠気が襲ってくる。トイレ（＊）の後に20時前には早々に眠りにつく。（歩数９．４千歩）

（＊）この山小屋でトイレは暖房便座のウオッシュレットであることに驚く。快適ではあるがやり過ぎ感も。なお、トイレ水洗化を進めた妙高市に対しては高谷池の景観保護の為に以前のバイオトイレに戻すこと等の意見が提出されている様だ。ＣＮＮの「日本のもっとも美しい場所36選」に選ばれた景観が失われようとしている。利便性向上による誘客動機と自然保護のコンフリクトがここにも。

9／29（水）晴れ時々曇り：火打山往復後黒沢池ヒュッテへ

4時半過ぎに目が覚め、5時半過ぎに食事の声がかかり、ビニール手袋をはめてセルフでご飯をよそい鍋から中華丼の具をかける。外は次第に明るくなり、高曇りの天気であるが問題なさそう。6時40分に火打山を目指して出発し、高谷池の右側に沿って敷設されている緩い登りの木道を進む。池（池塘）周辺から天狗の庭にかけてツツジ科の低木類の紅葉（黄葉）も進みつつあり、散在するナナカマドの赤は目に鮮やかであった。少し登って奇妙な造形の火山性の岩が点在する辺りから下ると「天狗の庭」の大きな看板が設置され、池塘の点在する広々とした庭の奥に火打山、影火打の稜線が連なり、風もない時間帯だったので池塘には「逆さ火打」の姿がくっきりと写り込んでいた。

木道が終り、ダケカンバ、シラビソなどが点在する岩の登路を進み出発から2ピッチでベンチのある雷鳥平に至った。この手前で笹ケ峰から頂上への道標は〈7／9㎞〉を示していた。この辺りはライチョウ生息地の北限

2021.9.29　逆さ火打（天狗の庭にて）

とのことで、運が良ければ遭遇することもあるとのこと。この先は所々で傾斜の急な木製階段を交えて灌木帯を進み、最後はハイマツ帯の急登を乗り切ると雷鳥平から50分弱で頂上に達した。妙高火山群の一角を占め２４６２ｍと標高的には最も高いが、噴火で形成された山ではなく基盤岩の隆起で生まれた山で南面は全体に嫋やかな印象である。三等三角点や岩屑がこんもりと盛られ、残念ながら到着時にはガスがかかってきて期待した眺望には恵まれなかった。頂上には５～６名が先着していた。少し遅れて上がって来た本間さんとガスが晴れるのを期待して40分以上粘るが一向に晴れない。

2021.9.29　火打山山頂にて（本間）

少し北側の糸魚川方面が薄く見えたがそれまでで日本海までは見通せなかった。已む無く下山にかかる。

この時期、花のシーズンは外れており、ある意味火打山の売りである花に出会うことは少なかった。偶にアザミ、ヤマハハコ（キク科）、リンドウを見かける程度で、この時期はやはり草木の紅葉がメインとなっている。火打山を背に黄色や赤に染まった灌木が迫る道を快適に進む。雷鳥平、天狗の庭のベンチでユックリ秋の草原を愛でて一息入れながら３ピッチ２時間で高谷池ヒュッテに戻った。ヒュッテ前のテーブルで昼食を摂り30分以上のんびりしてから12:40に腰を上げ、少し火打側に進んだ所が火打・笹ヶ峰・黒沢池の三叉路となっており、本間プランで１時間行程の黒沢池ヒュッテを目指した。火打山方面とは異なり濡れた土と火山岩がミックスする急な坂が現れ、暫く消耗しながらの登りが続いた。地図上では高谷池２１００ｍから途中茶臼山２１７１ｍを越えて２０００ｍの黒沢池ヒュッテに至る、造作もないコースの筈だったが、火打往復で少し疲労も感ずる身には簡単ではなかった。茶臼山を越えて下りにかかると眼下の草原に富士見平からヒュッテに延びる一筋の登山道が見渡せ、目的地のヒュッテのユニークな形の屋根が見えた。また、その先には明日の妙高へのコースとなる大倉乗越を含む尾根に多くの立派なダケカンバが見えた。その上には妙高山が頭だけ覗かせていた。

木道横のリンドウに慰められながら進んで14:05に六角形の球体の様な屋根を持つヒュッテに到着した。早速受付で宿泊手続き（９５００円）をとり、ビールを購入（@５００円）。ここで小生にとっては残念な事態が起きた。この小屋は日本山岳会との提携で会員

カードを提示することによって10％引きになる筈だが、受付の従業員は「うちはやっていない」とけんもほろろの応対。従業員にきちんと趣旨が伝わっていない所為かとも思うが、もめても解決策は出てこないと思い、帰京後に山岳会本部に改めて問合せ（＊）することにした。

（＊）帰宅後本部事務局宛にメールで上記の趣旨を伝え「会員優待サービス一覧」内容の確認を行ったが、担当の節田さん（明大OB、会報「山」編集人）から現地確認等行って正式に回答する旨のメール返信あり。その後、10／4付で黒沢池ヒュッテ・植木毅氏からお詫びの手紙と共に1千円のJCBギフトカードが送られてきた。節田さんにもその旨連絡して一件落着。

小屋前のテーブルで黒沢池の草原を眺めながら無事の到着をビールで祝杯。その後小屋に入って3階の寝床に上がる、なおこの小屋はインナーシーツ等は不要とのことであった。

3階の上の天井中央の天窓から外光が入る構造であり、寝床は吹き抜け風スペースに対して円形に展開され、コロナ対策で本来のスペース3人分を本間さんとシェアする形。全体がオープンスペースだが、この日の宿泊客は総勢8人程度で十分余裕がある状態。ペットボトルで持参の「甘露」500㎖を開けて本間さんと歓談するうちに、夕食の合図があり、一階食堂に降りる。

メニューはポタージュスープ、皿に缶詰イワシ2匹、沢庵他とワカメ味噌汁。ご飯とポタージュはお代りありとのこと。なお、トイレは別棟に4―5個の個室が並んでいるが、水洗式だがウオシュレットではない。（15・8千歩）

9／30（木）晴れ時々曇り：大倉乗越から妙高山を越えて妙高高原スカイケーブル駅へ

トイレで5時前に目覚め、15分頃に朝食の声がかかる。テーブルには直径20㎝位のクレープ3枚が皿に盛られ、コンソメスープ、缶詰果物、ジャム、コーヒーがセットされていた。

小生は寝起きでもあり、クレープ2枚を消化するのが精一杯だった。余り食の進まなかった本間さんは残ったクレープを行動食として携行していた。他パーティではクレープを食べられない（?）客が持参のご飯をレンチンして貰い、持参の卵をかけていたが、醤油を小屋番に依頼したところ、食卓用の容器でなく業務用の大きなボトルごと供されていた。小屋のメニューには醤油を使う料理はないので準備がないとの説明。

食後5:45に出発して、直ぐ大倉乗越へのダケカンバ林の急登にかかる。時々黒沢池の草原を見渡しながら30分で日当たりの良い大倉乗越（2150m）に出る。200m位下には長助池が望めるが、そこに直接下る道はない。ここからは本日の目的地妙高山が大きく見えるが、暫くは外輪山三田原山の腹を巻いて長助池分岐まで下り気味にトラバースしていく。

途中には昨日は見かけなかったトリカブト（妙高トリカブト?）が数株咲いていた。

本間プランでは乗越から分岐（2050m）まで30分とあるが、所々急な斜面を下る箇所6―7カ所にロープが張られ、ルートが崩れた部分などもあり、加えて加齢によるバランスの悪化等もあって意外に時間がかかり長助池分岐に着いたのは7:26と2倍の1時間近く要した。

ここで本間さんは下に見える長助池経由で下山すると言うが、手持ちの地図に2019年台風被害の崩落個所あり✖マークがあると説明して思い止まる。ここで5―6パーティをやり過ごし、中央火口丘の妙高山の登りにかかる（7:33）。本間プランでは1時間半のア

ルバイトの筈だが、火山岩と潅木混じりのキツイ急登に刻みを小さくして4ピッチかけ、10時過ぎに何とか頂上の一角北峰（２４４６ｍ）、一等三角点にタッチする。分岐から２時間半要したことになる。頂上手前の岩屋には太い注連縄が張られていた。（最高点は南峰２４５４ｍ）

幸い遠望が利く状況で、白馬、五竜、鹿島槍などの後立山の峰々の連なり、特に真ん中の鹿島槍が立派に見える。次第に雲が上がってきて視界が遮られるが、北側には日本海、

2021.9.30　白馬方面をのぞむ（妙高北峰にて）

佐渡島と思われる影を見る。暫くして本間さんも合流し、40分ほど写真を撮り、また、若い女性の２人連れにスマホカメラのシャッターを頼まれるなどして、ユックリ昼食を摂り大休止。

南峰へは比較的平坦な溶岩の道を辿り、途中に日本岩と称される大岩があり、岩に「日本岩、北峰へ１００ｍ、南峰へ４００ｍ」と表示されたプレートが張ってあるが日本岩の由来は不明。

2021.9.30　妙高山山頂にて（北峰、竹中）

南峰（妙高大神）に着くが、滞在10分ほどで下山にかかる。ルートは溶岩の固まった皺（しわ）の多い岩場の急下降で始まり、先ほどの女性に続いて進むが、程なく先行する姿が見えなくなり彼我のスピードの違いに愕然とする。この差は岩場などを渡る際のバランス力の差から生じているのは自明の理。１００ｍ位下がった辺りから潅木も出てくるが、急な下りにはロープが設置され、さらに２２７０ｍ前後にはロープ、クサリと連続する場所もあり、偶々下から上がってくる団体と出会うとその行き違いに時間を要する。我々は４～５人のパーティーに遭遇し、暫く岩場の途中のトラバース箇所で待機することになった。その下の岩場は太いクサリと岩にステップが自然に刻まれ下りの不安がなかった。その後は基本的に土の道が多く、ネマガリタケや濡れた粘土で滑りやすい所もあった。クサリ場から風穴（８合目・２１２０ｍ）、光善寺池（２０７０ｍ）と進み、南峰からほぼ３ピッチで天狗堂に達した。本間プランの行程１時間20分に対して１時間55分要した。その後は30分で林道に出て、大谷ヒュッテ（避難小屋）前を通過し、４４０ｍ先に林道から登山道への入口があり、標識にはスカイケーブル駅まで１５７０ｍ、１時間20分と記載されていた。林間のネマガリダケとスリッピーな土の道で、

延々と下って行くが、途中で濡れて不安定な土に滑って大転倒し、道脇の潅木の中に倒れ込んだのは大いなる反省事項。それでもほぼ１時間半でケーブル頂上駅に到着した。

ゴンドラに乗車して山麓駅で精算（初日に観光案内所で貰ったパンフレットの割引券利用で１１００円）し、そのままタクシーを呼んで貰って（二人共スマホの電池がゼロで役立たず）、妙高高原駅に帰着した。駅前の土産物店でビールを購入し、店内のイートインコーナーで乾杯。

その後は長野経由で北陸新幹線を掴まえて19:50 に東京駅到着。

今回は昨年の針葉樹会有志による蓼科山山行以来の２０００ｍを超す本格的な山行で、奥多摩周辺で低山歩きしかして来なかった身には too much かなとヘジテイトする気持ちもあったが、コロナ禍での緊急事態宣言も明ける直前だったのでややフライングではあるが久し振りの冬のスキー以外に足を向けていない高山への魅力が勝った。

プランニング、現地小屋予約、バス便、ケーブル運行確認等全て本間さんが骨を折ってくれたので、小生としては新幹線切符の手配とアルコール調達してザックに詰め、東京駅に出向き本間さんと合流するのみだった。計画通り遂行して無事に下山できたのは綿密な本間プランのお陰であり、感謝、感謝である。

コロナ明け前、ウイークデイの山行、しかも台風襲来を控えての計画だったので、小屋、ルートとも登山客は少なめであり、快適に秋の火打・妙高山を楽しむことが出来た。やはり、今どきの山は若い女性軍が非常に元気に活躍しているのを再確認した。

また、以前から感じていたことだが加齢に伴う体力低下、バランス回復力の低下を改めて実感させられ、我が身の安全を守るためにはそろそろ岳界からの引退を真剣に検討する時が来たかと寂しく感じたことです。小生としては２００６年８月越後駒ケ岳:中ノ岳縦走でスタートした越後の山シリーズを今回で閉じることになる。この間佐薙、三井、川名、高橋信、西牟田、遠藤、上原、蛭川、佐藤力、三森、中村雅、齋藤正など多くの会員にお世話になった、改めて感謝申し上げたい。

（写真撮影：竹中　彰）

２０２１年度　富士山ビュー山行報告

佐　藤　周　一
（昭54（１９７９）年卒）

参加者：竹中彰（１９６４）、本間浩（１９６５）、岡田健志（１９６７）、前神直樹（１９７６）、加藤博行（１９７７）、兵藤元史（１９７７）、藤田一成（１９７７）、松田重明（１９７８）、佐藤活朗（１９７８）、佐藤周一（１９７９）
（学生）内山晴貴（社４・副将）、岩崎太一（法３・次期主将）、神田陽太郎（経３）、猪股ひかり（社３）、櫻井かりん（法１）、及び小西大（顧問）　計16名

新型コロナのため、２年ぶりの開催となった富士山ビュー山行。昨年、懇親山行幹事の佐藤久尚さん（１９６６：以下、久さん）が計画した中央線沿線の扇山（１１３８㍍）行を踏襲することにし、コロナが沈静化したこともあって久しぶりに学生部員との合同山行が実現したほか、コロナ禍での部活動の必須条件とされた部顧問に昨年就任された小西

大一（まさる）橋大学大学院経営管理研究科教授（１９８７年学部卒）にもご参加頂く僥倖に恵まれました。以下、簡単に報告いたします。

１．プランニング段階

当初の企画者である久さんが脊柱管狭窄症で歩行困難な状況が続くため、小生が代役を引き継いだのが10月半ば。その後の三月会で12月12日（日）実施と決まり、学生にも声掛けして合同登山とするほか、「月見の宴」もコロナで中止となっていたので、下山後の学生・ＯＢ懇親会も抱き合わせで企画することになりました。

10月末には加藤博行さんとコースの下見を行い、当初の鳥沢駅からの登路は急坂が続くので、脚力に自信の無い方々のために四方津駅に近い犬目宿登山口から登ることに変更。一方、学生たちには隣の百蔵山から頑張って縦走して貰い、四方津在住の小西顧問共々、扇山山頂にて合流するというプランとなりました。

下山後の懇親会はＪＲ高尾駅南口の居酒屋を予約。仮に悪天で登山中止の場合でも懇親会だけは挙行する予定でおりました。ＨＵＨＡＣメールで呼びかけたところ、最終的には登山参加ＯＢは11名、学生は5名、懇親会にはＯＢ９名、学生２名の参加予定となりました。

２．当日の状況

懸念された天候は、高気圧に覆われて穏やかな晴天となり絶好の登山日和。残念だったのは小島前会長が体調不良で当日キャンセルとなったこと。四方津駅前には計10名のＯＢが参集。タクシーで犬目宿登山口まで行くのですが、予約できた台数が２台しかなく、１台には往復してもらうか・・と思案していたら、やや大型のタクシー運転手の「後ろの荷台スペースに２人乗れば良い」との提案に乗り、６人と４人に分乗、一回で済ますことが出来ました。

降ろされた登山口は下見の時とは違う場所で当初はナビゲーター役も困惑したのですが、直ぐに既知のルートに合流。暖かな日差しを受けながら樹林帯を進みます。１時間も歩くと白く輝く富士山も姿を現し、富士ビュー山行の目的達成。本間さんが少し遅れ始めたものの、緩やかな傾斜の登山道を辿ってほぼ予定通り12時少し前には扇山山頂に。既に学生部員と小西先生は30分余り前に到着済でした。昼食を摂りながら自己紹介する間、小生は用意してきた「お汁粉」作り。風も穏やかだったので、のんびりと山頂での憩いを楽しみました。

2021.12.12　扇山頂上から　撮影：岡田健志

記念の集合写真を撮った後、四方津へ下る小西先生と別れて下山を開始。鳥沢駅に向けて急坂をジクザクに下降する。梨の木平登山口で先を急ぐ学生部員たちと別れ、ＯＢたちは舗装道をゆっくり１時間余りかけて鳥沢駅へ。駅で懇親会に参加するため待っていた内山君と猪股さんと合流、高尾駅へ移動しました。

2021.12.12.　扇山頂上にて　撮影：岡田健志
（前列左から 桜井（法1）、猪股（社3）、岩崎（法3）、小西先生、加藤、佐藤（活）、兵藤
後列左から 神田（経3）、内山（社4）、佐藤（周）、竹中、松田、藤田、本間、前神）

（行程） 四方津駅（9:15）→（タクシーで移動）→ 犬目宿登山口（9:35）⇓ 扇山山頂（11:55−13:00）⇓ 梨の木平（14:05）⇓ 鳥沢駅（15:15）

＊学生部員は7時頃に猿橋駅を出発、百蔵山登頂後（9時頃）、扇山には11時過ぎには到着していた。

懇親会（「目利きの銀次：高尾駅南口店」にて、16時～18時半）

竹中さん・藤田さんを除くOB8名と学生2名の計10名で下山後の反省会を兼ねた懇親会。リアル呑み会は久しぶりという方も多く、和気藹々の時間を楽しみました。幹事としては好天で予定通り登山後の懇親会が出来てホッとしました。これが荒天による登山中止で懇親会のみの実施では直前キャンセル者が出ていたことでしょう。

4年生の内山君は農林中金に就職内定済。3年生の猪股さんは旭川出身ということもあり北海道庁への就職を希望している。北海道には小野さんという重鎮がおられるほか、最近も若手OBが転勤で赴任していたが、今はもう東京へ戻ってきているといったことが話題となった。猪股さんが里帰りしたなら学生部員たちも北海道に立ち寄り易くなる等の話も出ていました。いずれにしろ、学生さんは皆、この2年近くの間、まともな部活動が出来ず、登山経験を増やせない未曾有の厳しい時を過ごしてきたわけですが、オンライン中心となった学業生活も含めて前向きに考えていただき、これからの人生に活かして欲しいと願います。コロナもオミクロン株の感染拡大など予断を許さない状況が続いていますが、ワクチン3回接種等で何とか収束に向かい、再び学生さんとの合同山行が行える日が早く到来することを期待したいと思います。

（2021年12月13日記）

四国八十八ヶ所お遍路の旅

前神　直樹
（昭51（1976）年卒）

2021年3月末日をもって会社生活が終了、第三の人生の始まりを迎えて何をやるか、山登りは当然だが、そのほかに前々から考えていた四国の歩きお遍路がある。2004年6月の針葉樹会報101号に松尾さん（19

７２年卒）が四国遍路の話を寄稿され、そうか四国遍路があるのかと、現実的な話として頭に刷り込まれた。加えて、前神という姓はどこからきているのか?という疑問もあった。前神姓の人はインターネットによると全国でせいぜい５００人くらいのようだが、半分以上は愛媛県在住らしく、現に自分の父親も愛媛出身である。多分この姓は64番札所となる愛媛県の前神寺に関係しているように思えた。一度お遍路としてこの寺を訪問してみるのも面白いのではないか、と以前から思っていたところに、昔の取引先の人が一昨年秋に歩きで全88札所を巡ったと聞き俄然歩けるのではないかと思い始めた。総歩行距離約１２００㎞の数字にはちょっと怖気付いたが、山登りからすれば只平地を歩くだけの遍路なら何とか出来るのではないか、だめなら途中で帰ってくればいいだけと割り切り、昨年10月19日「スタンプラリーと間違えないでね」との揶揄めいた言葉に送られて羽田から徳島に飛んだ。

1番札所から11番札所である藤井寺まで1日半で歩いた時はこの調子からすれば88番札所の香川県大窪寺まで大したことはないのではないか、とちょっと遍路を甘く見て3日目50㎞以上を歩いたが、翌日筋肉痛を起こしてしまった。どう考えても1ヶ月以上はかかる長旅なので徒に飛ばすのは厳禁、周りの意見も聞いて一日の歩行は最長35㎞に抑えるようにした。マラソンのトップ選手であれば2時間以内で走れるだろうが、歩くとなるとこの距離は想像以上に長い。

その長さをつくづく感じたのは室戸岬までの道だった。徳島最後の薬王寺から高知県最初の室戸岬にある最御崎寺（ほつみさきじ）までが75㎞、途中民宿に二泊してやっと辿り着ける距離だった。道は国道55号線に沿って太平洋の荒波を見ながら延々と南西に向けて歩くのだが景色は単調で、行けども行けども気が紛れるようなものは何も出て来ない。レストランの看板が出ているので国道から離れて行ってみると廃屋、これにはがっくり。退屈さを紛らわせるために般若心経をプラスティックケースに入れてそれを見ながら歩いてみたが、そもそも般若心経の意味が解らないので容易なことでは覚えられない。ただつくづく思うのは、空海は本当にこんなところを歩いたのだろうか、と言うもの。今だから舗装された歩道をちゃんとした運動靴で歩いているが、平安時代にはこの荒波の波打ち際を岩に足を取られながらわらじで歩くのだから想像を絶する。

室戸岬への道と同様、足摺岬へも最後の札所から80㎞もの距離がある。ただ足摺岬への道は室戸岬の道と比べるとはるかに多彩で単調一辺倒ということはない。町もあるし気の利いたリゾートもある。足摺岬まであと約18㎞のところに大岐の浜なるところがあり、この宿で聞いたのは、西武グループの堤義明が三度も自家用ヘリで大岐に降り立った話だった。サーフィンの国際大会を何度か開催した大岐に惚れ込んだ西武は同地に一大リゾート建設を計画、自治体である土佐清水市

2021.11.6　延光寺（39番札所）に向かう遍路道　撮影：前神直樹

もこれに賛同、しかし最終となる住民投票でこの計画は否決されてしまった。理由は江戸時代から育ててきた防風林が伐採されてしまうという点だった由。今の大岐は昔建てられたリゾートマンションが一つ寂しく残っているだけの殺伐とした感じがするが、もし西武のリゾート計画が実現していればどうなっただろうか。この計画は20年以上も前の話で、もし実現化されていたとしてもその見込み通りのものになったかははなはだ疑問。しかしこのような話が過去あったわけで足摺への道は室戸に向かう道とは違って興味のある話や多彩な景色にあまり退屈することはなかった。

長々歩いた道で一番いいなあと感じたのは高知から愛媛県境を越えて宇和島、大洲、内子、久万高原、松山に至るいくつもの峠を越える江戸時代から続く古道を歩いた時だった。その間6日ほどの日数が掛かったが距離的には圧倒的に自動車路が多い、その中に山道そのものというと言えるような古道が自動車路に挟まれるように出てくる。こうした古道で人に出会ったことは一度も無く遍路道という標識が無ければ土地勘も無いだけに不安で堪らなくなるような道だったが、紅葉や川で餌を狙っているサギを見ているといい景色だなあと見入ったりした。

内子を経て久万高原に上がる途中に大瀬という僻地も僻地というような集落がある。ここを通った時見た小学校が非常にあか抜けていて、そんじょそこらの箱もの校舎とは明らかに違う佇まいを見せている。そのことを地元の人に話したところ、この校舎は大江健三郎が知り合いの建築家に頼んで設計してもらった由。曰く、「大江健三郎はこの大瀬の出身で高校は内子高校だったが、他の生徒とは明らかに違う高いレベルを感じた教師が松山東高校への転入を強く勧め、その後東大に進学して文学者になったんよ」と。この大瀬から遍路道は小田川という河川に沿って上がってゆくが、これが清流そのものでおそらく盛夏には大江少年も泳いだんだろうと想像するとこちらの身も洗われたような気がする。

高知から愛媛に抜ける遍路道は松尾峠なるところを越えるが、その先の車道で一人の老人遍路に追いついた。話すと御年86歳、今回で四国遍路27周目という猛者ともいえるような御仁だった。60歳で会社勤めも終わり遍路を始めたそうだが、1番札所から順々に歩く順打ちをすると翌年は88番から逆に回る逆打ちをやってそれを毎年繰り返しているとかで自分のような遍路一回目の人間には想像を絶する話だった。歩くスピードも老人を感じさせず、お名前は三枝さんとおっしゃる方で、若い頃何をやっておられたのですかと訊くにどうも国学院大学の山岳部だった様子。であれば、中野・アポロスポーツの松永さんをご存じですか?と話すがもう一つピンと来ていないようで、年代が違うのかも知れない。富士山登山は数知れず、エベレストを見るために登ったカラパタールやポカラから見たマチャプチャレの話をされていたので、金銭的にも余裕のある生活をされていたんだろうと想像する。この人とはこの後4回札所や道で出会うことになり、翌日結願という最後の宿でも一緒になった。ほぼこちらと同じペースで歩いたことになるが、一旦一緒になると地図を見なくてもマニアックな遍路道を教えてくれるのでずいぶん時間セーブにもなった。またどこどこのうどん屋は旨いとか、お薦めの遍路宿も教えてくれる。札所の寺に着くと納経するのだがその仕草も堂に入ったもので、般若心経を唱える様子はプロのお坊さんと変わらない。般若心経を読んでもしどろもどろになるこちらとはえらい違いだった。

三枝さん曰く、お遍路は松山に出るとそのあとは早いよ、と。特に高知から松山以前の愛媛は高知市内を除けば平均一日に1つか2

つの札所しか打てないが、松山では一日に８つもの札所を巡ることになった。松山から今治へはほぼ丸一日かけて歩くことになるがこの道も印象深かった。会社勤めの時には同じルートを１００回以上は往復したと思うがすべて鉄道か車での通過だった。そこを徒歩でゆくことがあるなど想像もしなかったが、じっくりと風景を見ているとどことなくほっとする。室戸岬に向かう時は太平洋の荒波ばかりを見ているが故に苦行という感じだったが、この松山、今治ルートは瀬戸内海沿いであるが故に波もほとんどなく、彼方に点在する島の光景は瀬戸内国立公園の名に恥じない。一昔前、この海を製鉄所の視察のために渡ったブラジルの資源会社の人間が「来日する前は日本は小さな国と聞いていたがそんなことはない、現にこんな立派な河があるじゃないか」と言ったとか。島が点在するこの海を見て河と思うのもすごい感覚だが、まだ自分は見たこともないアマゾン河は恐ろしいほど広大なんだとつくづく思う。

愛媛から香川に抜けるには途中３つの山寺を越してゆくがそれぞれ趣のある登山道でちょっとしたハイキング気分を味わうことになった。香川県に入って印象深かったのはお接待だった。81番から82番札所へは江戸時代から続く古道を歩くが、途中いくつかのコンテナを重ねた休憩所があり、コンテナの中は清涼飲料水で自由に飲んで下さい、とある。自動車が入れないここまでコンテナを背中に背負ってもって来る人がいるわけで頭が下がる。小屋風の休憩所では冷蔵庫があってここでも中の飲み物は自由に飲める。

観音寺市を歩いていた時、「お遍路さん、お遍路さん」と呼び止められ、差し出されたのは大きなおはぎが二つ、「このころはコロナもあって歩く人がおらん、待っとったんよ」と。このおはぎは大満足の昼食となった。高知の道を歩いていた時、農作業をしていた人に声を掛けられて「今仕事をしているので何も持っていないが、これ持っていって」と千円札を出された時にはびっくり。いくら何でも現金は受け取れませんと固辞したが、「自分も若いころお遍路で数え切れないほどのお接待を受けた、これはお大師様の功徳だと思ってください」と言われありがたく押し頂く。同じく高知のラーメン屋ではお遍路さんには鶏のから揚げ二個をサービスしますと小声で言われ、二個でなくてもいくらでも食べます、と答えたことがあった。

学校行事としてお遍路接待をしている高校生にも出会ったが、このお接待文化こそは遍路を支える一つの大きな要素であることは間違いない。

2021.11.21　団体遍路のお経の大合唱（天皇寺　79番札所）
撮影：前神直樹

88番札所・大窪寺に到着したのは徳島の１番札所から数えて37日目のことだったが、各寺を回ってみてつくづく思うのは空海という人間は余程強い体力と気力を持ち合わせていたんだろうなというもの。なんでここまで高いところに寺があるの、と思ったことは数知れず、空海自身は強烈なマゾヒストだったの

ではないだろうか。嘘か真か、空海が修行したと伝えられているところは断崖絶壁のようなところも多く、もし現代に生きていたら立派な登山家になったかもしれない、筆も立つようだし。

最後まで意味の解からなかった般若心経は暗記出来ないままに終わったが、これを合唱するがごとく唱える遍路の集団に出くわした時には隣で聞き惚れてしまった。

11月24日最後の88番札所を打ち終わると、もうそこからは大手を振って使える交通機関で一目散に高松に出たが、丸二日歩き詰めだった距離をわずか2時間ほどで戻ってしまったことには一抹の寂しさを感じる。ともあれ無事最後まで歩き通してくれたニューバランスのジョギングシューズと自分の膝に感謝をしつつ、高松駅で夢にまで見たかつ丼を食らって遍路旅を終えた。

（２０２２年1月　記）

■冬の上高地のサル

原　博貞
（昭41（１９６６）年卒）

先日、ぼんやり新聞を読みつつ、ぼんやりテレビを見ていたら、タイトルに「雪国のサルの新しい越冬食」とありました。家内が「何？ 青森は大間のマグロかな」とアホなコメントをしていたら画面の猿が魚を2尾くわえて雪の中をゆうゆうと歩いており、テロップに上高地梓川の河原にて、と出ました。途端に小生の頭の中は50数年タイムスリップし昭和40年3月の春合宿の延長戦が浮かんできました。

延長戦は奥又の岩登りを予定していましたが徳澤園の小屋番のウメ公が「今年は雪が多すぎ間違いなく雪崩が出る、俺の目の黒いうちは絶対に奥又には入らせない」と頑張り、やむなく明神にテントを張りウロウロしていました。ある朝、仕方が無いから屏風方面でも偵察するか、と河原を歩いていると、ある山岳会の連中が大きなポリ袋にどっさり魚を入れているのを発見し「どうした？」と聞くと「そこの雪解け水溜まりにイワナがウジャウジャいて手掴みでこれだけ捕れた。今から帝国ホテルの木村さんの所に持って行き酒と交換して貰うんだ」と威張っていた。我々は吹雪の中、屏風に向かってＴ４まで登ったものの吹雪が激しく、トボトボと退却し明神橋近くまで来て「そうだ、この辺りでまだイワナがとれるかも」と水溜まりを探し腕まくりして手探りしたらいるいる！ 逃げ回らず石の間に頭を突っ込むだけなので簡単に捕れる、尻尾を掴んで引き出し、雪の中に放り出しアッ言う間に20匹程捕れた。

ただ吹雪の中で腕が痺れ疼痛がするので、そこらへんで中止しカチカチに凍った魚を抱えテントに帰りました。早速、コッフェルの蓋にラードを溶かし凍ったイワナを乗せ、暴れる奴をコッフェルで押さえつけて揚げ焼きとし、むしゃぶりついたのでした。あまり美味かったという記憶は無いが、なにせ山に入って20日以上経っており動物性蛋白に飢えていたので、結構な食料になりました。いま、上高地でこんなワイルドな食事をする人間はいないでしょうが、代わりにお猿さんがやってくれているようですね。

■シャンさん、池知さんを囲んで

シャンさん（旧姓山本の山を中国語読みにしてこのように呼んでいた）と池知さんを囲んで旧交を温めました。お二人とも関東にお住いながら、都心から遠くに住んでいたり、体調が今一つと言った理由で、如水会館からも懇親山行からも足が遠のいています。

そこで、同年代の会員が小田原へ出向いて一席をともにして、昔話に花を咲かせました。

（文責　岡田健志）

2021.12.1　小田原「だるま」にて　撮影：岡田健志
前列左から　池知昭洋(1966)、坂井溢弘(1966、旧姓山本)、本間浩(1965)
後列左から　岡田健志(1967)、中村雅明(1968)、小島和人(1965)、佐藤久尚(1966)

会務報告

2022年針葉樹会
臨時総会兼新年会報告

▽臨時総会兼新年会報告

以下の通り開催されました。

日時：2022年1月21日（金）
　臨時総会18:30～19:00
　新年会　19:30～20:30
場所：如水会館14階「記念室東西」

Ⅰ．臨時総会の成立

総会員数　特別会員2名、会員141名
内議決権行使（賛成）会員　10名、
委任状（議長一任）提出会員　34名、
出席会員　16名
合計60名の総会出席者数となり、会員141名の3分の1以上（47名以上）の規定を充たし、総会が成立しました。

Ⅱ．出席者及びオンライン参加者

■会場出席者　16名　（　）は卒年（西暦）
竹中彰（1964）、小島和人（1965）
佐藤久尚（1966）、岡田健志（1967）
吉沢正（1967）、中村雅明（1968）
井草長雄（1973）、前神直樹（1976）
加藤博行（1976）、兵藤元史（1977）
藤田一成（1977）、佐藤周一（1979）
岡部寛史（1980）、中西茂（1981）
小林修（1981）、佐々木豪（2021）
特別会員　山崎孝寿
学生　井上仁（4年）、内山晴貴（4年）、猪股ひかり（3年）

■オンライン参加者　10名
石原脩（1955）、金子晴彦（1971）
松尾信孝（1973）、白石章治（1986）
川名真理（1988）、斎藤誠（1988）
田形祐樹（1994）、糟谷知紀（2010）
山岳部顧問　小西大
学生　岩崎太一（3年）

Ⅲ．臨時総会議事

前神議長の開会宣言により臨時総会を開始し、最初に加藤総務幹事より総会の成立を確認した。（上記総会の成立参照）

次に100周年記念事業の特別予算動議の説明に入った。（31～34ページ参照）

総務幹事より、特別予算について、100周年記念事業は、①山岳部の歴史に関わる二つの記録物を残すこと　②針葉樹会と学生で

二つの記念行事を実施することが、昨年7月の総会で決定しており、今回はこれらの実現に必要な費用がほぼ固まったので、特別予算として提案した旨の説明があった。

事業のうち、一番費用のかかる写真を中心とした山岳部１００年誌の進捗については、編纂委員の兵藤会員より、写真誌の概要、作成進捗状況と今後のステップについて、スクリーン上のパワーポイント資料で、説明があった。（35～37ページ参照）

資料の説明後、今後の編集作業において、掲載写真に写っている人の人定やキャプション記載について、会員の協力を広く求めた。

続いて、針葉樹及び針葉樹会報のデジタル化事業については、総務幹事より概要を述べたのち、本事業推進担当の中村（雅）幹事より、デジタル化対象資料の補足説明があり、デジタル化作業は2月末を目途に完了しＨＰに掲載予定であること、デジタル化に当たって、資料を提供いただいた会員に対し、お礼の言葉があった。

総務幹事より、全体として３００万円の必要な予算に対し、昨年12月に市川陽一会員（１９５９年卒）より、大口特別協賛金として２００万円の申し出をいただいたこと、それを踏まえて残りの必要な資金手当については、１００万円からできれば余裕を見て１５０万円を目標に、針葉樹会を挙げて会員の協賛金やその他の方法で集めたい旨説明があった。

議長より、本動議への意見を求めたところ、オンライン参加の石原会員（１９５５年卒）より発言があった。

「針葉樹には戦中時期の記載が極めて少なく、滝谷４尾根の冬期初登攀も数行の記事しかない。記念誌ではそうした時代もできる限り触れてくれると有難い、また過去針葉樹会として大きな寄付は①始めて部室を造るとき、②戦前の装備が無くなったとき、③旧部室を立ち退いて新しい部室を造るとき、そして今回が４回目だが、寄付を無事集めて良い記念誌を作って欲しい」（要旨）と賛意が述べられた。

暫くして決議をはかり、特別予算は満場一致で承認された。

次に前神議長より、昨年就任された山岳部顧問の小西先生を針葉樹会の特別会員としてお迎えする動議が提案された。小西先生には、今後山岳部学生と大学のパイプ役をお願いすると同時に、針葉樹会の活動にも参加していただきたいと動議提案の主旨説明があった。

本日、オンラインでオブザーバー参加いただいた小西先生より自己紹介があり、その後満場一致で特別会員に承認された。

以上で臨時総会は終了した。

2022年1月　針葉樹会臨時総会議事

開催日時；2022年1月21日（金）18：30～
開催場所；如水会館14階記念室東西

（議事）
1.　一橋山岳部創部100周年記念事業特別予算の件（決議事項）

針　葉　樹　会

（議事運営細則）
1. 総会は全会員の3分の1以上（委任状を含む）の出席をもって成立する。
2. 総会の議事は、重要案件については出席者の4分の3以上の賛成をもって決定する。
その他の案件に関しては3分の2以上の賛成を持って決定する。
3. 「重要案件」とは、規約の改正、組織の変更、会長・副会長・監事の異動、
非経常的な支出を要する事項、その他会長が重要と認めた事項を言う。
4. 総会の議事運営及び議事録作成は幹事会が行う。

会員出席状況（在籍は2022年1月20日現在）
＜在籍会員数＞

特別会員	2名	
会員	141名	
出席会員	16名	
委任状提出会員数	44名	
合計	60名	（定足数47名以上）

1.　一橋山岳部創部100周年記念事業の特別予算案（決議事項）

「大正11年（1922）6月21日の放課後に化學室で山に就いての講演會があり、一橋山岳會の発會式が行われた。」（吉澤一郎会員が自身の日記より引用：針葉樹第六号248ページ）
その日から、一橋山岳部は間もなく100年を数えます。2022年6月にその日を迎えるにあたり、今年度7月の総会で承認された創部100周年記念事業について、今般その内容と必要な予算が固まりましたので、特別予算を計上して事業の実現を図りたく、ここに動議を提出いたします。

(1) 創部 100 周年記念事業の内容と進捗状況

① 創部 100 周年記念誌“写真で見る山岳部の 100 年”一橋大学一橋山岳部（仮題）の制作・発行

1) 制作進捗状況

2022 年に創部 100 年を迎えるにあたり、この 100 年に山岳部活動に参加した人々の写真記録集を作成したらどうかということで、2018 年より前神副会長（現会長）を中心に有志で会員諸氏からの写真資料の蒐集を開始し、2021 年 11 月末までに、掲載候補写真約 600 枚が集まりました。今後、掲載写真最終選定とレイアウトを編集会議を中心に固め、追加写真の蒐集とキャプション整理、説明文章と補足資料を整えて仕上げていく段階にきています。

2) 記念誌内容

部報「針葉樹」が、時代毎に部員が文章と若干の付属写真で活動記録を残してきたのに対し、今回は、それぞれの時代の合宿や訓練山行を中心に、そこに参加した部員の多くの顔が見え、時代が見える写真を中心とすることで、一橋山岳部 100 年の全体が俯瞰できるようなものを目指しています。

(A) 編集方針

・100 年間に在籍した部員の「顔」を出来るだけ載せる
・この間の部の様子が時代と共にどう変化してきたのかをうつす
・装備、ファッションなどの登山風俗の変化を表す
・これからの部員達に先人の足跡を伝える

(B) 主な章立ての内容（項目）

・合宿等の主要山行は 4 つの時代に分けて掲載
・新旧部室（宴会、送別会、針葉樹会の周年集合写真等を含む）
・海外遠征（山岳部員が現役で参加したもの）
・山の生活（装備、ザック・テント、ファッション等の今昔）
・遭難事故（写真で追悼集や追悼山行、遭難碑所在地等を紹介）
・図書・文庫（針葉樹全冊、周年節目の針葉樹会報等を写真で紹介）

3) 発行時期

遅くとも 2022 年末までの発行を目指します。(100 年記念行事の写真を含める予定)

4) 発行部数

300 部を予定。現存会員、山岳部員へ配布の他、写真を提供いただいた物故会員遺族、外部関係先（お世話になった先や他大学等）に寄付し、余部を販売予定とします。

5) 印刷製本／発行所

現在「針葉樹会報」を制作／印刷しているヤマノ印刷 1 社に絞って見積もりを依頼。記念誌には、「針葉樹」や「針葉樹会報」から転載する写真もあり、(2)100 年記念事業の総デジタル化事業依頼先と一括化することで、コスト低減が図れることもメリットです。

6) 製作費及び配送費見込み

B5 サイズ　本文モノクロ（ハードカバー）約 250 ページ（内 32 ページカラー写真）
300 部　　製作費約 233 万円、配送費他約 23 万円

② 部誌「針葉樹」OB 会誌「針葉樹会報」の総デジタル化
針葉樹 1～14 号（15 号はデジタル版あり）及び針葉樹会報 1～110 号（それ以降はデジタル版あり）をヤマノ印刷に一括スキャンニング依頼し、一橋山岳会ホームページに掲載して、次世代に引き継ぐこととします。
スキャンニング費用一式　25 万円　　2022 年 2 月末デジタル化完了（HP 掲載）

③ その他
1） 創部 100 周年記念山行“北岳”（9 月末～10 月初旬を予定）
2） 創部 100 周年記念“拡大月見の宴”（11 月を予定）
諸経費、通信費他雑費 19 万円

記念事業費合計　300 万円

(2) 必要費用に対する資金手当の考え方
創部 90 周年事業では、「針葉樹 15 号」350 部制作を始め、富士登山、芦安登山道整備で、総予算約 130 万円（内針葉樹 15 号 80 万円）で取り組み、一般会計から多く供出しました。しかし今回は写真中心の周年誌制作に現在予定している体裁で、約 230 万円かかかることがわかり、資金手当てが大きな課題となり、一般会計からの繰り入れを含め、種々実現可能性を検討してまいりました。
写真蒐集の過程で気づかされた事ですが、既に亡くなられた会員の場合、山の個人写真は概ね処分されて残っていない為、その時代の山岳部に集った人々の貴重な活動の見える写真が、これまで散逸されてきた実態があります。今回の機会を逃すと、更に多くの個人所有の写真資料が消滅して残らない現状から、本企画はラストチャンスととらえ、資金繰りのハードルを解決して、何としても発刊したいと思案中でした。
そうしたところへ、12 月に市川会員（昭和 34 年卒）より、本事業への特別協賛金（200 万円）を提供いただきました。有難く使わせていただくことで本事業推進に向け、資金手当目途が立ち、一般会計からの繰り入れなしで、進めることが可能となりました。
今回の記念誌は、会員の皆様、山岳部学生には、一人一冊配布いたします。その一方、市川会員からの特別協賛金の内 150 万円をベース（50 万円は予備費としておく）に、不足資金を会員の皆様からの特別賛助金という形で、お一人一口 5 千円、できれば最低二口 1 万円として、より多くの会員の皆様の賛助を仰ぐことをお願いしたいと考えます。そして、特別賛助金と販売代金（2 冊以上希望される会員や外部販売）を合わせて不足資金 150 万円を確保し、全体で 300 万円の本事業予算としたいと考えます。

(3) 総予算額 300 万円の特別予算と別口座での管理
以上の項目について、別添資料の通り総額 300 万円の特別予算を計上し、会員からの特別賛助金＊、販売代金等の収入で賄う計画としました。（添付予算内訳書参照　＊特別賛助金の払込お願いのため、記念誌送付時に振込用紙を同封いたしますので、皆様の協賛を是非お願いしたいと思います。）
なお、本特別予算は、“針葉樹会 100 周年記念”口座で別口座管理し、会計幹事が運用に当たり、一般会計とは別途運営し報告することとします。また別口座管理が終了後残高がある場合については、一般会計に繰り入れることとします。

以上

【一橋山岳部　創部100周年記念事業関連予算（案）】　2021/12/20

（2022年1月1日～2023年12月31日）

（単位：千円）

支出			収入		
（項目）	予算	備考	（項目）	予算	備考
1)100周年記念誌関係			特別賛助金　①市川会員特別協賛	1,500	＊
・記念誌発行費	2,332	ハードカバー			
・発送費、通信連絡費等	225		特別賛助金他　①会員特別協賛金	1,500	
			②販売その他		
2）針葉樹会報デジタル化関係					
・会報デジタル化経費	250				
3）その他					
・記念誌発行記念パーティ等経費	100	”拡大月見の宴”他			
・その他経費	93				
（支出小計）	3,000		（収入小計）	3,000	
次年度繰越	0				
（合計）	3,000		（合計）	3,000	

【詳細内容】

（支出）

・記念誌発行費　：300部（ヤマノ印刷見積額）

・発送費　：会員及び購入希望者へ発送
（750円/部、300部）

・会報デジタル化経費　：ヤマノ印刷よりの見積額＋予備費

・パーティ経費　：会員よりの入金額との差額他
（パーティ代：@5,000円、50名、内会員30名）

（収入）

記念誌販売　：8,000円/1部を予定　（原価 7,773円/1部）

（配布案）　会員分　143部、現役学生用　28部（2021．7現在）
物故会員遺族（写真提供）9部
外部団体、大学寄付用等　20部
販売対象　100部（会員複数購入分を含む）

＊市川会員からの特別協賛

市川陽一会員（昭34）より、創部100年事業支援として、200万円を寄付いただいた（12/9）。
有難く本特別予算に150万円を充当し、50万円は別途予備費として保持したい。本協賛金により、一般会計からの繰り入れ額は不要となる。

参考（一般会計の推移）

一般会計11/11付残高	：5,429千円
針葉樹会費納入見込額	：　200千円（40名）
2021年度予算支払見込額	：▲890千円
2021年度期末残高見込	：4,739千円

※本件は一般会計口座と別口座にて管理予定。

制作進捗状況

2018年より雨神さんを中心に写真/資料の収集を開始、現時点で掲載候補写真約600枚を収集。今後、追加写真の収集と並行して写真最終選定、レイアウト固め、キャプション整理などを行い、年内発行を目指す（100周年記念行事の写真も掲載するため）。

記念誌内容（草立て案）

- 各宿等の主要山行は4つの時代に分けて掲載　（～1945～67～91～2022）
- 海外遠征（現役山岳部員が参加したものを原則とする）
- 新旧部室他（宴会、送別会、針葉樹会の周年集合写真等を含む）
- 山の生活（装備、ザック・テント、ファッション等の今昔）
- 遭難事故（追悼集や追悼山行、遭難碑所在地等を紹介）
- 図書・文庫（針葉樹全冊、周年節目の針葉樹会報、先輩の著作等を紹介）

＜方針＞

- 100年間に在籍した部員の「顔」を出来るだけ載せる
- 部の様子が時代と共にどう変化してきたのかをうつす
- 装備、ファッションなどの登山風俗の変化を表す
- これからの部員達に先人の足跡を伝える

100周年記念誌について

（仮題）
『写真で見る山岳部の100年』

針葉樹会新年会
2022年1月21日
by　兵藤

1937-1　バットレス4尾根冬季初登

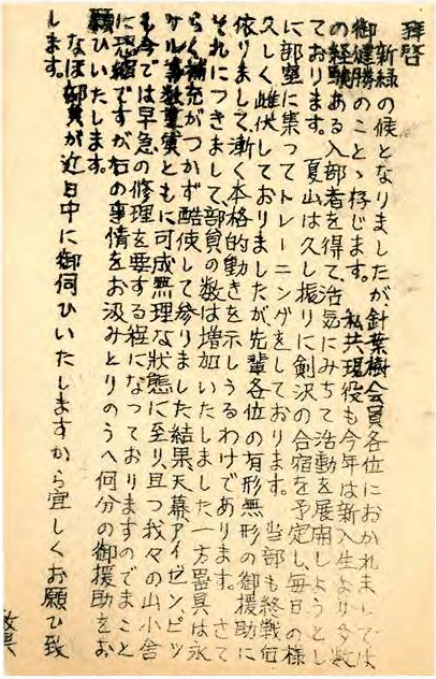
1939-12　滝谷4尾根冬季初登

1936-12　冬合宿
北岳バットレス
キャンプ地

1957-12　冬合宿
極地法にて槍から奥穂
槍沢!!　の登高

北海道　大雪山系
クワウンサイ沢

服装・装備に注目
1975年　vs　1991年
脚絆/地下足袋/ワラジ　vs
渓流足袋
ヘルメット/ハーネスの有無



拝啓
新緑の候となりましたが、針葉樹会員各位におかれましては御健勝のことゝ存じます。
私共現役も今年は新入生より今迄の経験のある入部者を得て活気にみちて活動を展開しようとしております。
夏山は久し振りに剣沢の合宿を予定し、毎日の様に部室に集ってトレーニングをしております。
当部も終戦直後久しく雌伏しておりましたが、先輩各位の有形無形の御援助に依りまして漸く本格的動きを示しうるわけであります。
さてそれにつきまして部員の数は増加いたしましたが一方器具は永らく補充がつかず酷使して参りました結果天幕アイゼンピッケル等数量共ともに可成無理な状態に至り、且つ我々の山小舎も今では早急の修理を要する程になっておりますのでまことに恐縮ですが右の事情をお汲みとりのうへ何分の御援助をお願ひいたします。
なほ部員が近日中に御伺ひいたしますから宜しくお願ひ致します。
敬具

左：現役からOBへの援助要請はがき、1951年6月22日付け

下：日本山岳会所有の諸先輩の著書や訳書

サポーター募集中

お助け頂ける事ありませんか？

当面:
- 写真の場所・人名・年月の特定
- 写真にまつわるエピソードの提供
- キャプション書き

後日:
初校のチェック

創部 100 周年記念事業に特別賛助金を!!

１．特別賛助金　；　１口 5,000 円（最低２口 10,000 円）
２．振　込　先　；　三菱ＵＦＪ銀行赤坂支店（店番６０９）
　　口 座 名：針葉樹会 100 周年記念
　　口座番号：普通０３４５６２９
３．備　　考　；　上記 100 周年記念口座は、年会費で使用しております口座とは別口座となりますので、ご注意お願いいたします。

（会計幹事　中西　茂）

Ⅳ．新年会

冒頭前神会長より、新年の挨拶があった。

新年のご挨拶

針葉樹会々長　**前神　直樹**
（昭51（１９７６）年卒）

前神です。２０２２年の新年を迎えるに当たり、この場をお借りしまして一言ご挨拶申し上げます。

今年は皆さんがよくご存じのように、一橋山岳部創部１００周年を迎えます。あまり仰々しいことは考えていませんが、いくつかの計画している記念事業は先ほども種々説明のありました通りです。その中の目玉は記念写真誌の作成です。先ほど兵藤さんが説明してくれましたように、過去の種々の写真を掲載していきますが、山岳部という一つの家族を構成してきた個人個人がなるべくたくさん登場する、いわば家族写真集のような雰囲気になると思っています。

この一連の編集作業の中で、山岳部１００年の歴史を改めて振り返ることになりました。

小谷部全助という不世出のクライマーを生んだ戦前の創成期から、戦後の登山大ブームに乗ってわが山岳部も部員が大幅に増え活動も活発化、１９６１年には初めての海外遠征となるアンデス登山が行われました。その後も山岳部の活動は活発で海外遠征も行われましたが、いつしか世の中の登山ブームも去り山岳部員の数も減りながらも、辛うじて命脈を保ってきました。２０１０年頃からやっとのことで部員が増え始め、今日に至っています。

針葉樹会も山岳部ＯＢ会として発足しましたが、その当時は懇親会であったと理解しています。しかしその後行われた海外遠征を支援するため、針葉樹会は懇親組織から議決決定を行う組織に変わりました。ただ針葉樹会が支援する海外遠征も、今となっては少し非現実的な話になっています。一方針葉樹会は、山登りが好きで集まった山岳部部員のＯＢ・ＯＧが構成する会でもあり、今海外遠征と大上段に構えるのではなく、本来の懇親組織として一番会員にマッチしている山登り活動を、もっともっと活発化させていきたいと思います。ここ2年近くコロナで活動が大いに阻害されてしまいましたが、おそらく今のオミクロンも早晩収まると言われており、この春くらいからは誰からも後ろ指を指されることなく、心置きなく山登りが楽しめることになると信じます。是非皆さんで大いに山に行きましょう。本日特別会員になられた小西先生も山好きでおられ、これから会員と一緒される機会も増えるでしょうから、大いに盛り上がると信じています。

先ほど山岳部を家族に例えましたが、それが適当な表現かどうかは別として、現役山岳部員はこの家族を支える基盤です。昨年亡くなられた岡垣さんは、先に言いました戦後の山ブームに乗って山岳部が膨張する時のリーダーをやっておられましたが、当時部員に言っていたのは二つだったそうで、時間があれば部室に来ること、山登りは雪上訓練と夏合宿の参加は必須だがそれ以外は自由、というものだったようです。現在の現役山岳部活動は、ほぼ必須項目が無い完全自由な活動になっています。コロナの所為で活動にも大きな制限が掛けられ、部として思うような活動ができなかったわけですが、もうすぐに来るであろうコロナ収束に合わせて、活動を活発化させてほしいと思っています。ただ、山登りにどうしても付いて回る事故の可能性を抑えるためには、必要最低限の訓練山行も必要であり、60年以上も前ですが、部員が増加していた岡垣リーダー時代の活動を倣うのも一つではないかと思います。

もしかすると今の山岳部は、この戦後勃興期と似たような状況にあるのかも知れません。

針葉樹会会員の皆様には、会の基盤となる山岳部活動にさらなる支援をお願いするとともに、懇親山行には是非積極的にご参加ください。

繰り返しになりますが、今年こそ皆さんと一緒の懇親山行が大いに増えることを期待しまして、遅ればせながらの新年の挨拶と致します。

ありがとうございました。

続いて、小島相談役より、コロナ禍でこの二年間山岳部の活動が大きな制約を受け、登山技術の伝承や部員のつながりが影響を受けてしまったが、ここからまた復活に向けて、皆さんで協力してやっていきましょう、と挨拶があり、乾杯となった。

その後、食事をしながら、オンライン参加の会員全員より、次々に自己紹介と近況や今年やりたいことについて、スピーチが続いた。またリアル参加会員からもオンラインスクリーンに向かって、コロナ禍の最近のトピックス等の話題が続いた。

その後、参加学生より卒業する4年生、後を次ぐ新主将、副将の山岳部新体制の紹介があった。

最後に、岡部幹事先導で、山讃賦を静かに斉唱し、兵藤副会長の閉会の挨拶で終了した。

今回は本格的なリアル／オンラインのハイブリット新年会となったが、色々な地域の地方会員からの新年会参加は新鮮であり、都合の良い時間に参加し、スピーチの話題も多岐に及んで、楽しいものになったのではないかと思われる。ただカメラワークや会場作りについては、いくつかの課題も見られ、次回以降の改善のテーマといたしたい。

（２０２２年１月24日　文責　加藤）

2022.1.21　新年会　撮影：加藤博行
前列左から 兵藤、小島、前神、竹中、佐藤（久）、吉沢
二列目左から 中西、井草、中村（雅）、内山（社4）、井上（社4）、猪股（社3）、佐藤（周）
三列目左から 山﨑、佐々木（修1）、岡田、岡部、小林、加藤

2022 年 1 月針葉樹会新年会に寄せられた近況

卒年	お 名 前	参加/オンライン	近　況　（メッセージがあったもののみ掲載しています）
昭23	大 島 理 則	不参加	92歳でいろいろな事が出来なくなっていますが、元気です。（家族）
昭30	石 原　　脩	オンライン	100周年の内、昭和26～27年に歴史に留めたい事項が2点程あり、5分程時間を頂戴したい。
昭31	石和田四郎	不参加	記念事業に携わって下さっている諸兄姉に心から御礼を申し上げます。 諸兄姉のご健勝、記念事業の成功を祈念致しております。間もなく「卒寿？」の老輩より
昭31	佐 薙　　恭	不参加	盛会を期待します。
昭33	加 地 幸 雄	不参加	今年の山行日数は、十二月二十二日現在58、目標の60が眼前です。 僕の教え子Jimmy ChinがTHERE AND BACK Photographs from the Edgeと題する本を出しました。登攀写真集の最高峰と思います。よろしければ、閲覧お薦めします。 皆さんお元気で山をお楽しみください。
昭33	西 海 隼 雄	不参加	御盛会をお祈りします。
昭33	新 井 慶 司	不参加	腰痛のため欠席します。
昭34	市 川 陽 一	不参加	年相応に脚力、体力が衰え、暫く恒例として居りました尾根筋への水汲み及び山行は控えて居ります。眼前の比叡山脈を眺めている日々です。 ご盛会をお祈り致します。
昭34	澤 木 一 夫	不参加	盛会を祈ります。
昭35	丸 子 博 之	不参加	ご案内感謝。体調問題あり、新年会（兼臨時総会）残念ながら欠席します。
昭39	中 橋 寿 雄	不参加	足腰の神経障害で自力歩行ができないので、もっぱら家で趣味等を楽しみながら、終活を進めています。また夫婦で老々介護をしながら、それなりに有意義に過ごしています。 みなさんも、今そこにある危機に充分注意して「ご安全に」お過ごしください。
昭39	村 上 泰 介	不参加	傘寿を迎え週3車通勤から、週1.5日バス通勤に。ご盛会を祈る。
昭43	中 村 雅 明	参加	今年の山行はコロナ禍により大きなものは以下の2つと低調でした。 1.5月末　毛勝山　　2.10月中　森吉山＆名瀑めぐり 来年は2年続けて延期した7月の北海道（雨竜沼湿原、南暑寒別、アポイ岳、様似山道）、9月の南ア（塩見岳＆北岳）、10月の穂高（北穂池、北穂～奥穂～前穂）にぜひ行きたいです。（コロナの終息次第ですが）
昭46	金 子 晴 彦	オンライン	お便り別添
昭48	松 尾 信 孝	オンライン	年々雪が鬱陶しく感じてくるのは年のせいだと自覚するこの頃です。 気持ちとしましては参加して皆様にお目にかかりたいのですが、議会の予定が不明でもう少し日程がはっきりしてからお知らせします。（内容要約）
昭52	兵 藤 元 史	参加	100周年写真誌作成のお手伝いをしております。1922年から10年ほどの写真が2～3枚しか蒐集できていません。50周年の段階からとは申しませんが、もう少し早く集め始めたらと思うことシキリです。
昭59	山本礼次郎	不参加	私は元気にやっております。当日は伺えませんが、近々にまた皆様にお目にかかりたいと存じます。
昭59	安 島 孝 知	不参加	ご手配、いつもありがとうございます。 今は登れていませんが、街でキックボクシングを続け、山に備えております。
昭60	石 丸 義 男	不参加	今年末で定年（三井物産）となりましたが、引続き、富山の残り（再雇用）、同じ仕事を継続行います。来年からは本格的に地元の「まち創り」に汗かく予定で、二足の草鞋、、、頑張りたいと思います。 P.S.今年は氷見や新湊での鰤漁獲高が激減で、価格も高騰。氷見での鰤宣言も出されて居りません…活況じゃないと、少々寂しいですね。 今朝（12/30）の鰤起しで、今日は今年最後のセリですが、沢山の漁獲を期待していますが…
昭61	白 石 章 治	オンライン	
昭63	川 名 真 理	オンライン	4月に足首を骨折し、その影響で膝を痛めてしまいましたが、ようやくゆっくりランニングできるようになりました。 コンディションを整え、軽いハイキングから再開したい思います。 今後とも、どうぞよろしくお願いします。
昭63	斎 藤　　誠	オンライン	
平6	田 形 祐 樹	オンライン	私は三重県伊勢市に来て、丸11年になります。 伊勢観光や紀伊半島山登りの時は、事前にお声がけください。 できる限り、短時間でもお会いしましょう。 yuukitagata@gmail.com
平22	糟 谷 知 紀	オンライン	

学生の活動記録

部活動報告

２０２１年の一橋山岳部は、２０２０年に比べて少しずつではありますが、かつてのような宿泊山行を含めた活動を実施することができました。昨年以来、山岳部は大学当局のガイドラインに従い多くの制限を受けています。しかし、そのような中でも８名の新入部員が入ってきてくれたことで、山岳部の活動を発展させていく上での土台を固めていくことが部の方針となりました。そのため、大学当局の規制の下、日帰り山行や非公式の山行を実施することで、部員同士の交流や山行経験を積んできています。山行表に記載されている通りですが、一昨年に比べて非公式の形をとることで宿泊山行を複数実施することができております。もちろん、以前のように毎月公式での宿泊山行と夏合宿を実施できるようにしていくことが当面の目標ですが、その達成に向けて少しずつではありますが進歩を見せていると言えます。

現在の部の課題として、一昨年に加入した２年生４人が退部してしまったことで、部員の中間層が薄くなってしまっており、上級生が下級生にノウハウや経験を伝達するという従来の部員の教育プロセスがうまく機能していないという懸念があります。部への所属はあくまで当人の自由意志に基づくものであり、また、現２年生は２０２０年のコロナ禍の混乱の真っ只中で入学し、限られた情報をもとに所属コミュニティを選ばざるを得なかった事情もあるため、このような状況の回避は困難であったと言わざるを得ません。事態の打開のためにはこれまで実施してきた部内教育のためのさまざまな講習や、学んだことを活かしていく実践の場としての山行実施を確実なものにしていくことが必要であると考えています。私自身は２０２１年末をもって部の活動を引退しているため、今後の活動については新体制の部員に任せることになりますが、針葉樹会の皆様には引き続き、現部員の活動を温かく見守っていただけると大変ありがたく存じます。どうぞよろしくお願い致します。

（文責：井上　仁（社４））

尾　瀬

期間：２０２１年９月７日（火）～８日（水）

メンバー：川原の乃（ＣＬ、社４）、内山晴貴（ＳＬ・装備、社４）、櫻井かりん（記録、法１）、官於淇（食事、経１）

コースタイム

９月７日（晴れ）

０８４０ 沼田駅 ＝＝＝ １０１２ 大清水
１０３０ ＝＝＝ １０３９ 一ノ瀬 １０５０ ― １１５６ 三平峠 １２０１ ― １２３６ 尾瀬沼ヒュッテ（泊）

９月８日（雨）

０３３０ 起床 → 尾瀬沼ヒュッテ ０５００ ― ０８１８ 俎嵓 ― ０８５３ 柴安嵓 ― １２１０ 喫茶ひげくま １２５１ ― １４１１ 山の鼻 １４１５ ― １５１７ 鳩待峠 １５２５ ＝＝＝ １５５０ 尾瀬戸倉 １６０７ ＝＝＝ 沼田駅（解散）

行動と感想

自分にとっては約１ヶ月ぶりの宿泊山行かつ初めての尾瀬ということでかなり楽しみにしていた山行だった。１日目は天気が良く、お散歩気分で木道を歩いて行った。ただし木道は所々朽ちているため足元には常に気を配りながら歩く必要があった。

夕食はハンバーグシチューで、シチューに１人１個のハンバーグを加えるというのはな

2021.9.7　燧ケ岳（尾瀬沼ビジターセンターから）
撮影：桜井かりん

かなか斬新なアイデアだと思った。食事担当が「カレーの具材」というすぐに使えるカレー用野菜のパウチを持ってきてくれたのが非常に便利だと感じた。今回は初日に利用したが生野菜を使いにくい2日目以降でもこれで野菜が摂れるので2泊以上の宿泊山行では積極的に活用してみてもよいかもしれない。

17時頃に夕飯を終えたため再び自由時間となった。自分はまた周辺を散策し写真をたくさん撮っていたのだが、18:30にテントに戻ったところ自分以外の3人は既に就寝しており、自分が戻ったことで起こしてしまった。翌朝が早いのだから早寝するのは当然のことなのに自分勝手な行動をとって迷惑をかけてしまったので深く反省した。次回以降の宿泊山行では他のメンバーと何時ごろに寝るかを事前に確認し、早めに就寝準備を始めようと思う。

2日目の朝食はフルグラだったのだが、優秀な食事担当がスキムミルクとはちみつを用意してくれており、温かくておいしいフルグラをいただくことができた。朝食前に1つひやりとしたのが、メンバーの1人のヘッドランプが電池切れとなってしまったことである。予備電池を持っていたのが4人中2人しかおらず、それぞれ単3と単4だったため、もしもう1つ以上のヘッドランプが電池切れになっていたらもう予備が無かったかもしれない。夜明け前に行動することも多いので全員が各自の責任で予備電池を持ってくるべきだと思う。個人装備の不備を防げるように個人装備の表を用意してもいいかもしれない。

テント撤収時に少し雨に降られてしまったが、トイレ前の屋根付きスペースを使って荷物整理をしたので比較的楽に出発準備ができた。

出発する頃にはなんとなく空が明るくなってきておりヘッドランプを使わずとも歩くことができた。

休憩をこまめに取りながら燧ヶ岳の山頂を目指して歩いたが歩くにつれて天候は悪化していった。樹林帯を抜けると雨と風がひどく、山頂付近では顔に雨が吹きつけて痛いほどだった。

山頂では写真を撮るとすぐに下山を始めた。ぬかるみがひどいことで有名な道を下ったが、本当にぬかるみだらけだった。下山の道のりは長く、集中力が途切れ何回も転んでしまって下半身は泥だらけとなった。

見晴が近づいたころにはみな精神的に疲弊し、レインウェアが機能しなくなったメンバーもいたため、2泊3日の予定を2日間に短縮して東京に戻ろうという流れになった。3日目の天気も悪くなりそうだったため、予

2021.9.8　俎嵓にて
（手前左から 川原、内山　後ろ左から 官、桜井）　撮影：川原の乃

定より3時間長く歩くことにはなるが帰ることにした。見晴以降はほぼずっと平坦な木道だったため、滑らないようにだけ気をつけて早足で進んだ。鳩待峠を出発する乗合バスにギリギリ間に合い、戸倉で路線バスに乗り換えて、無事沼田駅まで戻ることができた。

装備の不備や時間管理など反省点も多い山行だったが、やはり山は楽しかった。

（文責：櫻井かりん（法1））

山岳部新体制（2022年1月1日～）

主将：岩崎　太一（3）
副将：猪股　ひかり（3）
副将：淺香　俊敬（1）
会計：関　響太郎（1）
総務：下西ノ園　尚樹（1）
記録：櫻井　かりん（1）
書記：
装備：官　於淇（1）

2022年3月卒業者進路

川原　の乃：NHK
井上　仁：一橋大学大学院経済学研究科
　　総合経済学専攻
内山　晴貴：農林中央金庫
横尾　一眞：JAL

2021年1月～12月　山行表

一橋大学山岳部

時期 年	月	日		月	日	コース	メンバー	山域
2021	4	3				蓼科山	佐々木豪(CL,社研1)、猪股ひかり(社3)、岩崎太一(法3)	
	4	11				高尾山・景信山(新歓山行)	内山晴貴(CL,社4)、猪股ひかり(社3)、新入生2名	
	4	11				日の出山(新歓山行)	佐々木豪(CL,社研1)、新入生3名	
	6	19				カロ―川谷	佐々木豪(CL,社研1)、半澤凌平(SL,社3)、山田さん(OB)	
	6	26				日の出山	岩崎太一(CL,法3)、神田陽太郎(SL,経3)、奥野雄太郎(法3)	
	7	10				川苔山	岩崎太一(CL,法3)、稲垣紀一郎(SL,商1)	
	7	28				御岳山，日の出山	官於淇(CL,経1)、櫻井かりん(SL,法1)	
	8	2				御岳山，大岳山(新歓山行)	山下弘喜(CL,商4)、新入生1名	
	8	7	～	8	8	金峰山，瑞牆山	佐々木豪(CL,社研1)、岩崎太一(SL,法3)、官於淇(経1)、櫻井かりん(法1)	
	8	12	～	8	13	霧ヶ峰	稲垣紀一郎(商1)	
	8	20				棒の折山	岩崎太一(CL,法3)、櫻井かりん(SL,法1)	
	9	8	～	9	9	尾瀬	川原の乃(CL,社4)、内山晴貴(SL,社4)、櫻井かりん(法1)、官於淇(経1)	
	9	6	～	9	10	旭岳	佐々木豪(CL,社研1)、横尾一眞(SL,商4)、猪股ひかり(社3)	
	9	11	～	9	12	尾瀬	岩崎太一(CL,法3)、猪股ひかり(CL,社3)、奥野雄太郎(法3)、岩本尚紀(商3)	
	9	19	～	9	20	ナメラ沢	佐々木豪(CL,社研1)、半澤凌平(SL,社3)、前神さん(OB)	
	9	25	～	9	26	甲武信ヶ岳	神田陽太郎(経3)	
	9	25				川苔山	関響太郎(法1)	
	10	9	～	10	10	赤岳	神田陽太郎(CL,経3)、岩崎太一(SL,法3)	
	10	16				那須岳	川原の乃(CL,社4)、横尾一眞(SL,商3)、官於淇(経1)、稲垣紀一郎(商1)	
	10	17				安達太良山	猪股ひかり(社3)	
	10	23	～	10	24	雲取山	岩崎太一(CL,法3)、猪股ひかり(SL,社3)、櫻井かりん(法1)、下西ノ園尚樹(経1)、淵田寛一(社1)	
	10	30				谷川岳	山下弘喜(CL,商4)、神田陽太郎(SL,経3)	
	11	6				三つ峠山	淺香俊敬(CL,経1)、官於淇(SL,経1)	
	11	6	～	11	7	女峰山，男体山(日光)	井上仁(CL,社4)、内山晴貴(SL,社3)、山下弘喜(商4)、清水弘隆(社4)	
	11	13				塔ノ岳	佐々木豪(CL,社1)、神田陽太郎(経3)、伊東瑠香(IPP1)、稲垣紀一郎(経1)	
	11	18				筑波山	神田陽太郎(CL,経3)、平野智士(SL,経3)、猪股ひかり(社3)、岩崎太一(法3)、奥野雄太郎(法3)	
	11	21				二子山	岩崎太一(CL,法3)、櫻井かりん(SL,法1)、下西ノ園尚樹(経1)	
	11	28				妙義山	猪股ひかり(CL,社3)、半澤凌平(SL,社3)、関響太郎(法1)	

編集後記

『針葉樹会報』も今号で節目の１５０号となります。

寄稿者の卒年を西暦併記にしました。会務報告などにならったまでですが、以前から西暦に統一したいと思っていました。会員の卒年が、昭和・平成・令和の３代になり、西暦一本にする方が、なにかとわかりやすい、という理由からです。いずれ西暦で統一しようと思います。

２０２２年１月開催の臨時総会において、山岳部顧問（２０２１年就任）の小西大教授を当会特別会員としてお迎えすることに決まりました。（本文30ページ参照）山好き、写真好きの小西先生には、いずれ、会報へのご寄稿もお願いするつもりです。

編集係りの楽しみの一つは、原稿にかこつけてメールや電話で先輩と話が出来ること。電話をかけると初めはオレオレ詐欺かと警戒されるけれど、話が登山のことや写真のことになると、一気に警戒心が取り払われて、話が弾むのが楽しいです。

高齢、若手会員の意欲的な山行報告を収納することが出来ました。安全登山にこころがけることはもちろんですが、山行計画や下山届けなども忘れずにご提出を。

（岡田　健志）

■会費納入のお願い

２０２２年度（22年６月～23年５月）の会費納入をお願いいたします。

会費（**普通会費**）は卒業年次に関係なく、一律５０００円です。（ただし、卒業後60年以上経過した会員については会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず**賛助会費**を募集しております。**賛助会費**は一口１０００円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっておりますので、その資金手当てのためにも、**賛助会費**へのご協力をお願い申し上げます。

◎会費納入先◎
三菱ＵＦＪ銀行　赤坂支店
口座名　針葉樹会
口座番号　普通４８２５６４７

＊振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入ください。

会計幹事　中西　茂